言語学

言語美学

金原省吾

國語科學講座

—I—

言語學

言語美學

金原省吾

株式會社
明治書院

國語科學講座

—I—

言語學

言語美學

金原省吾

株式會社

明治書院

目次

一　聞き或は讀みの深さ……………………〈三〉
二　表　　現……………………………〈一六〉
三　言葉の幅……………………………〈二七〉
四　言葉の定位…………………………〈四二〉
五　寡默の美……………………………〈六〇〉

言語美學

金原省吾

一　聞き或は讀みの深さ

今から十七年も前であるが、私は日本橋の或る老舗に家庭教師をして居た。三月の學期休に、その家の子供さん二人をつれて、久能山から箱根にかけて小旅行をした事があつた。その時その家の主人H氏は私に二百圓渡して、これでは不足すると思ふが、もし落しでもしたらつまらないから、これだけ持つて行つてくれ、無くなつたら電報をうつてくれといふ事であつた。興津に泊り、箱根に泊つて私には二百圓はおろか百圓も使へず、六七十圓使つたきりで歸つて來た。主人H氏は笑つてどういふ使ひ方をしたのかといふ。私は茶代の出し方も、祝儀の出し方も知らず、それがあまり少量であつたので、爲替で追加を送つたといふことであつた。とにかく旅に出る時、一一使途は明細に書きとめて來てくれといふ事であるから、私は明細書を差し出した。女中さんを呼んで家計簿を取りよせ、順次に記入した。〆めて見ると二錢勘定が合はない。不思議な顏をしてまた計算し直した。それでも猶二錢あはない。「先生わか

りませんか」と言ふ。とにかく總額六七十圓の處であるから、二錢の錯誤は思ひ出せない。「仕方ありません」と言ひながら、「二錢、使途不明」と記入した。二百圓以上いる筈のを、六七十圓で濟して來てゐるのだから、それ位のことは問題にしなくてもよかりさうなものだといふ腹がある。帳面にまでそれをつけずともよかりさうなものだといふ腹がある。一應記帳がすむと、再び手をならして白紙を取りよせ、殘つて來た金の中から百圓とつて、紙に包み、それを私に差出して、「御苦勞樣でした。御本でも買つて下さい」と言ふのである。私は成る程と思つた。この場合問題なのは、金高ではない。使途不明である。私を疑つて居るかと言ふと、私を疑ふ樣子は微塵もない。私はその金で勉強すると思ふから、その金は惜しくない。惜しいのは使途不明の二錢である。この時私は實業家の心掛はさういふものかと思つた。

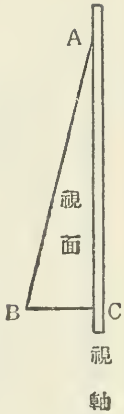
これは平福百穂先生の事である。私が先生の塾に日曜毎に美術史の講義に行つてゐた大正十年頃の事である。私の講義が終つて、後は雜談になつた。その折お弟子さんの一人が、自分の叔父さんの話をした。叔父さんといふのは、その當時はまだ高等商業であつたと思ふが、そこの教授某氏である。商業の教授だけあつて實に細かい、鉛筆が一寸位になると、それを御丁寧にも竹の軸にはめて使ふ。――さういつて笑つて話した。その時平福先生は新聞をよんでゐられたが、新聞を疊の上に置いたと思ふと、ずつとその方に向きかへつた。「君、鉛筆をそれ迄に惜んで使ふ心持がわからない樣なら、畫をやつても無駄だ。今日から畫をやめ給へ。」さういつて、顏にあらはれた激しい不快な心持が、いつ迄も消えなかつた。

些細なるものは、最も具體的なるものである。形が些細なる故に、價値も亦些細であるとは言へない。この「具體

的小」に向つて集中するのが、日本の高き單純性である。全面に心を散布せず、ある些細なる部分に集中する單純性は、古くより吾等の誠實となつて居る。全身の脉に心を散布せずして、手頸の一つの脉に向つて集中する。一つの單純を以つて、全體の動向を支持するのが、吾等の單純性である。この具體に、卽ちこの具體的小に集中するのが、吾等の言葉の美學である。

然らば何故にかかる特色が生じたか。これは視と表現との性質に基くのである。

視の働は、實に直接である。視る意向はずんずん動き進んで行く。これが視る働の軸になる。視られたるものは、軸のA點から始まつて、軸の側面に增加して行く。そしてＢＣがこの視內容の底面である。底面はこの時の視る働の一應の完成である。視の面はＡからＢＣに向つて擴大すると共に、常に軸ＡＣから直角の方向に支持せられる。この軸の側方支持によつて、視の面は、厚さと堅さとをもつてゐる。



しかし視の面は必ず底に向つて擴がる三角形をなすとは限らない。むしろ視の働の進行は、視內容を縮少する方向に進んでゐる。視面を單純狀態に支持せんが爲である。視の働がある度迄進行すると、視の面は次の如き八つの性質をあらはすのである。

1. 視軸に對する視面の垂直線は、漸次に縮少する。縮少すると共に、面は堅厚となる。
2. 縮少を起すとともに、表現の傾向が一層顯著になつて行く。この表現傾向が盛になるに從つて、視軸は直接に、表現形式を支持する。視軸が表現の意志を示してゐる。

3. 表現形式が視軸によつて直接に支持せられると、表現は特に顯著になり、視面は表現面に變つて行く。ここに言葉があらはれる。視面が言葉になると共に、表現面は一層堅厚を增大する。

4. 表現面の堅厚を增大すると共に、表現面は視面から剝離し、視軸を中心にして廻轉し、獨立する。ここに視面は言葉となる。ここに於いて、表現面は、その底邊を得て完成する。作品はこの底邊の最も完成せるものの一つである。

5. しかもかかる表現の底邊化は、徐徐に行はれて來たもので、遡れば視面生起の最初から存したものである。

6. 視面と表現面とは、成立の過程に於いても、成立の後に於いても、互に投影し合ふ。ここに視軸の成長がある。

7. 視面と表現面とは、廻轉して重ねることが出來る。しかし表現面の方が、視面より成長してゐるのが自然である。視軸は表現の働を直接に支持するやうになつてから、猶成長したからである。言葉になる事によつて、視る働も亦成長するのである。

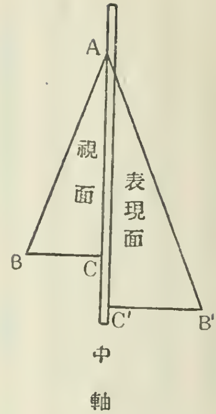
8. 表現の面は、視の面から軸によつて廻轉したのであるから、廻轉して剝離した後も、猶意向の軸によつて支持せられる。意向の軸ははじめは視軸であつたが、今は表現軸である。これを以後中軸とよぶ。かくて視面と表現面とは中軸、即ち意志を共有する。換言すれば、視る意志も、語る意志も、共通である。視る意志が即ち語る意志である。

かくて視面と表現面との性質を比較すれば、

共有するもの。軸。A。A B と A B′ との方向。B C と B′ C′ との方向。

相違するもの。A B とA B′ との長さ。B C の長さと、B′C′ の長さ。

而して第一に、B′ C′ の線は、中軸より漸次に第一節、第二節の如く、節を以つて並んでゐる。これが語或は文の段落である。



第二に B′ C′ の線は、背後に三角形A B′ C′ の面の展開がある。この展開を背後に持つことが、作品の厚と堅とを示すものである。作品はこの背景あるが故に實に彈力的である。作品の性格は要するに、A B′ C′ 三角形の底邊に對する、一切の面の性質によつてゐる。

視る働は、B C に止る。B C が B′ C′ になるには、視る働だけでは、不可能である。それが言葉にならなくてはならぬ。言葉になる間に、中軸は進み、B′ C′ になる。この言葉によつて進む働が、作品化の働である。故に表現面は言葉を持つ爲に、生長した面である。しかしこの延長も價値に於ける延長増大であつて、形體の見かけに於いては、或は縮少してゐる。しかしこの縮少も、もとは視面の中にふくまれた性質であつて、作品になるに當つて、突如として起つた變化ではない。隨つてこの場合にも、A B 傾向と、A B′ 傾向とは、一致して居る。

表現面が底邊化する爲には、次の性質が必要である。

1. 視面の表面が、平滑で、厚く堅いことが必要である。而して視面が平滑であり、堅厚である爲には、第一に視面がその最初から、言葉で貫かれて居なくてはならぬ。第二に視面が最初から中軸によつて、支持せられ

て居る事が必要である。この軸の支持力が、所謂「文意」である。

2. 換言すれば、視面が言葉になり切り、中軸が言葉を十分に支持する場合には、表現面は直に剝離し、廻轉することが出來る。廻轉が容易なる爲には、圖式的に C′ B′ 線が軸に直交することが必要である。

3. 表現面の堅厚平滑なる爲には、推敲を要する。この推敲は、既に視面の中にあつた傾向であるが、表現面に於いては、一層顯著でなくてはならぬ。この推敲の終つた場合、表現面は完成し、底邊、即ち作品 B′ C′ が出來る。故に推敲は作品化の中心力である。B C が B′ C′ に生長し得たのは、言葉による。しかも言葉をして、更に言葉たらしめるのは、推敲であるから、B′ C′ の生長は推敲の結果だと言ひ得る。而して之を圖式的に言へば、推敲とは視面と表現面とを重ねた場合に於ける B C C′ B′ 面である。

然らば言葉を聞く、或は言葉を讀むとは、何であるか。

聞或は讀とは、表現面の下底に、即ち作品の各點に、A 點から斜線をひく事である。この斜線は結局 A C′ 線及び A B′ 線によつて代表せられる。そして A C′ 線即ち中軸は、意の深さであり、A B′ 線は形の深さである。しかも中軸は常に表現面を支持するが故に、A B′ 線も中軸によつて支持せられる。故に形の深さは、意の深さによつて、支持せられる。そしてその支持力の薄弱なる場合には、A B′ 線と A C′ 線とは異性質であるが、その支持力が緊密である場合には、同性質である。前の場合には、意と形とが分離し、後の場合には、意と形とが一致する。而して意と形との一致する度の高い程、作品は完全である。即ちこの兩線の一致によつて、圖式的に言へば、B′ C′ 線は完全である。隨つて作品の深さは、中軸線によつても、側線によつても、測る事が出來る。換言すれば意によつても、形

によつても、測る事が出來る。しかも中軸と底邊とは直角をなすが故に、表現面は直角三角形であり、形の線は斜邊である。故に形の線は、中軸の線より長い。これは形が意よりも、言葉を持つからである。中軸に於ける未表現が、斜邊に於いて完全表現になり切つて居るからである。而してこの深さを示す二線の間にあるA點からの、總べての斜線は、文の味の深さを示すものである。

聞或は讀は、底に向つてA點から多くの斜線を下す事であるが、このことは換言すれば、B′C′によつて、その背後のものの一切、即ちAC′B′の全部を感ずる事である。これが聞きの深さ、讀みの深さである。

随つて書かれ或は語られるそれぞれの言葉も、その背後には常に三角形の表現面を持つて居る。この背後の面をよみ或はきく事が、言葉の深さを、よみ或はきく事である。一つの言葉を、類似せる他の言葉に辭書的に置き換へるのは、言葉を聞き或は讀んだとは言へない。置き換へるには、言葉の表現面を、そのまま置き去りにしなくてはならぬからである。

この言葉の背後なるものに就いて、谷崎潤一郎氏の「私の見た大阪及び大阪人」から引用する。

嘗て祇園の茶屋に遊んだとき、夜が更けて急に空腹を感じた私は、座に居る五六人の藝者を顧みて、「何か食べないかね」ときいてみた。日頃顏馴染みの遠慮する人たちではなかつたから、實際そのときは何處かで食べて來たあとで、欲しくなかつたのであらう、「君は、君は」と順に尋ねて行くと、みな首を振つて、「いりません」と云ふ。すると最後に一番歳の若い兒の所へ來ると、ちよつと考へてから、「あとが出ェへん」と、一と言きまり惡さうに云つて笑つた。皆の中でその兒だけ一人腹が減つてゐたのだが、東京の藝者だとこんな場合に、「あとが出ないわ」とだけでは濟まないやうに思ふ。……東京なら、何とかもう少

し、前後に言ひ譯のおしやべりがつづくか、でなければアケスケに「あたし頂くわ」と云ひさうに思ふ。……藝者に限らず關西の婦人は凡べてさう云ふ風に、言葉數少く、婉曲に心持ちを表現する。それが東京に比べて品よくも聞え、非常に色氣がある。……今日東京の言葉は標準語となつてゐるくらゐだから、文法的には最も正確であり、表現法が緻密で自由であり、說いて委曲を盡すのには一番便利であるけれども、純日本風の奥床しい女の言葉としては甚だ不向きだ。一と口に言へば東京の言葉はおしやべりに過ぎるやうに出來てゐる。上方にだつておしやべりの女は澤山ゐるが、それでも東京のおしやべりとは趣が違ふ。と云ふのは言葉が違ふからである。例へば大阪では「てにをは」を使ふことが少い。使つても東京ほど使ひ分けが神經質でない。これは適切な引例でないかも知れないが、東京語で「あたしは分らないわ」と云ふのと、「あたしでは分らないわ」と云ふのとは使ふ場合が違ふ。然るに大阪ではそんな區別がなく、恐らく孰方(どつち)の場合にも「うち分れへん」と云ふだけであらう。……大阪の言葉はさう云ふ點が妙に粗い。最初に東京語で書いてこれを大阪語に直さうとすると、二種類の表現に對して一種類しか表現法のないことがある。……東京には「遊ばせ言葉」を始めとして尊敬の程度、職業年齡階級等の複雜な變化に應ずる云ひ表はし方が實に豐富だ。「する」と云ふ言葉一つに對しても、「します」「なさる」「なさいます」「遊ばす」「遊ばします」「いたします」「するんです」「するのです」「するのでございます」「しますんです」「いたすのでございます」「するの」「するのよ」「するんだ」「するんだわよ」「するわ」「するわよ」「するんだわ」「してよ」「しやがる」――まあ思ひ出せるだけでもこんなにあつて、一つ一つ皆幾らか氣分が違ふ。大阪語にはとても、こんなに澤山はあるまい。單語の上へ「御」の字を付けることも東京の方が多いやうである。……で兎に角さう云ふ風だから、大阪語には言葉と言葉との間に、此方が推量で情味を酌み取らなければならない隙間がある。東京語のやうに微細な感情の陰翳までも痒い所へ手の届くやうに言ひ盡す譯に行かない。東京のおしやべりは何處まで萬遍なく撫で廻すやうにしやべるが、大阪のは言葉數が多くても、その間にポツンポツン穴があいてゐ

る。言葉としての機能から云へば東京語の方が無論優つてをり、現代人の思想感情を表はすには、これでなければ用が足りないであらうが、しかし隅隅までホジクリ返すやうに洗ひ浚ひ云つてしまふのは、何んとなく下品なものだ。東京語の方が餘計丁寧な云ひ廻しを使つて却つて品惡く聞えるのは、そのためなのだ。ぜんたい「寡言（かげん）」を美徳と考へる東洋にあつては、言語も國民性に叶つて出來てゐるのだから、その理想に背くやうに發達させると、少くともその言語に備はる美點は失はれてしまふ。……さすがに關西の婦人の言葉には昔ながらの日本語の持つ特長——十のことを三つしか口へ出さないで殘りは沈默のうちに仄かにただよはせる、——あの美しさが今も傳つてゐるのは愉快だ。

かくて言葉は單なる符號ではない。その背後にその言葉を產出した生活がある。大阪語には、その背後に大阪人の生活があり、東京語には、その背後に東京人の生活がある。言葉を通して、この背後のものに迄達するのが、聞きの深さ、讀みの深さである。

言葉の背後にあるもの、作品の背後にあるものに、觸れる處まで行くのが、聞き乃至讀みの深さである。同時に言葉が背後のものを持つこと、背後のものの產出として語らるること乃至は書かるることが、語り乃至は書きの深さである。

AからB′C′に下した斜線は、B′C′の背後の三角形に對する還元である。而して背後の三角形を支持するのは、AよりCへの延長を中軸とした性質であるから、更にこの中軸に向つて還元しなくてはならぬ。故に聞き或は讀みの深さは、第一に背後の三角形への還元、第二に三角形の支持者たる中軸への還元である。この還元の還元迄進めて

來て、はじめて聞きと讀みとは根源に達したのである。文意を得るとは、この言葉の根源に迄達した成績を言ふのである。故に聞き或は讀みの立場は、A より C への延長たる中軸線に向つて、全三角形を歸着せしむる如く、聞き進み、讀み進む處にある。

線 B′C′ に現れて居るものは必ずしも多くはない。その少いものの背後なるものに、一一觸れて行く。そこには視の作用と、表現の作用との生起的關係がある。表現の面を中軸に還元すれば、表現面と視面との剝離を、再び視の面に還元する事が出來る。剝離を還元して、視の面に重ねることが出來る。そこには現れた形を一點とした大きい世界がある。ことに B′C′ が表現面の特に縮少せる底邊である場合には、些少なるものは、一層些少である。この些少なるものに卽して背後の全體を讀みとり、聞きとらなくてはならぬ。かくて中軸への還元を、更に視面へ還元すれば、言葉の問題は、視の問題、卽ち生活の問題にかへされる。ここ迄言葉が歸つてくれば、言葉は完全に生活に還つて行く。言葉を生産した生活に言葉がかへつて行く。言葉を中軸にかへすのが言葉の深さであるなら、言葉を視にかへすのは、言葉の厚さである。厚さとは深さを一層立體的にした假の言葉である。

かくて言葉の成立は、厚さを有するものであるから、ここに些少なるものの等閑に附し得ぬ理由がある。些少なるものを、深さと厚さとに讀み進め行く用意が、讀みの態度であり、聞き進め行く用意が、聞きの態度である。ここに些少なるものの持つ價値がある。特に寡言を美德とし、單純性を至境として來た日本の言葉と文學とにあつては、些少なるものの價値を見落す事は出來ない。これが單純にして寡默なる生活と藝術との產出であり、それを味讀し行く吾等の心である。

聞き讀む働は、次の如き性質を持つ。

1. 表現面を中軸によつて廻轉して、視面に還元する。

2. 視面に還元しきれぬ餘剩が、最も作品化の働の强かつた部分であるから、その點に力を集中する。

a. 如何に中軸が延長したか。

b. 如何に底邊が移動したか。

3. 表現面の底邊の各點に、A から斜線を下す。これは底の各點が、中軸的に如何に成立してゐるかを示すのである。この斜線は、中軸線と斜邊線との兩性質を、それぞれの事情に適應せしめた成績である。文の深さはこの斜線の統一としての斜邊線、中軸線となる。

4. かかる還元を更に中軸によつて廻轉させて、視面と重ねる時は、ここに成立的にみられた言葉がある。

故に眼光紙背に徹するのは、要するにこの各點の斜線を、中軸線に還元する力、更に中軸線によつて廻轉する力の透徹をいふのである。言葉の深さとは、この透徹性を言ふのである。言葉が視面と表現面との間に浮動すること、換言すれば、表現面になり切らぬ言葉には深さがない。そして表現面になり切る爲には、言葉はその基礎を視面に置かねばならぬ。視る働の中にあらはれた言葉が、書く働になり切り、中軸線を通して、滲透し合はなくてはならぬ。この狀態の言葉を、表現面特に作品底邊から視面に還す力が、讀み或は聞きである。作品を讀むとは、言葉をよむのである。語を聞くとは、言葉を聞くのである。讀み或は聞きの透徹とは、言葉の透徹である。言葉以外に作品はない。しかし作品は單なる言葉ではない。背後に視る働をふくみ、言葉の產出をふくんだ言葉である。この視る働にかへし

て行く言葉の讀み或は聞きに達するのが、國語生活の樂しさである。

言葉のうしろには見る働がある。この視ることを外にして語ることを考へる譯には行かない。例へば「源氏物語」の「桐壺」に帝が桐壺を失はれてからの悲しみを描いて、

はかなく日頃過ぎて、後のわざなどにも細かにとぶらはせ給ふ。程ふるままに、せむ方なう悲しうおぼさるるに、御方方の御とのゐなども、たえてし給はず、ただ涙にひぢて、明かし暮らせ給へば、見奉る人さへ露けき秋なり。

といつてゐる。この「露けき秋なり」は、人の心の露けさと、屋外の自然の露けさとの、一緒になり、交融した視面の描寫である。悲しみの心を、自然の露に見れば、心も亦露けく、しみじみと秋を感ずるのである。自分の心を自然の中に見、自然を自分の心の中に見るのである。この視面を廻轉すると、ここに「露けき秋なり」がある。即ちこの「露けき秋なり」の背後には、人を見、自然を見る眼がある。見る眼の働の無い人は、他の人の視る眼の働にも深く入り得ない。故に讀み或は聞く爲には、その基礎として、自分の視る働がなくてはならない。

視る働について、兒島喜久雄氏が、注意すべき觀察をしてゐる。視る眼が達すべき限界に就いて言ふのである。藤田嗣治君の力作。（昭和九年九月九日、東京朝日新聞の「二科會評」中）

藤田君の描いた日本人は皆西洋人が描く日本人見たいである。……日本人が日本人をかく場合には單に日本人の人種的タイプだけを摑んで滿足しては居ない。なほその上にモデルの個性まで摑まうとする。ところが西洋人や藤田君のやうな準西洋人は先づ第一に日本人の人種的典型に眼をつける。さうしてそれが本當の日本人だと考へるのだらうとおもふ。なる程それは日本人のタイプには違ひない。そのタイプに個性が加はつたものが吾吾日本人のいふ本當の日本人なのである。だから藤田君の描

いた日本人は皆うつろな顔をしてゐる。嚴めしい眼付はして居るけれどもあれは藤田君が描く眼のマニエールで個性の宿つた眼つきぢやないのである。嘘だと思ふなら藤田君の描いた眼を殘らず比べて見て見たまへ。

これは見る眼の限界即ち視面が、如何に表視面に直接するかのよい例である。

かくて自ら視面を持つもののみが、他の視面にも到り得るのである。しかし自分の視以上の視にあへば、自分の視は教育せられる。ここに根源の學びがある。

私自らを振り返へると、私の文章の讀みは手寫から始つて居る。私達の少年時代には、今の樣に印刷術も進まず、謄寫版の如き簡便なるものもなく、副讀本的のものも、模範文も、すべて先生が之を板書し、生徒が之を書寫した。書寫の作業が、一時間も二時間も續くことがあつた。しかし寫して居ると自然に了解される。だから先生は寫させたままで次の過程に進まれる事が多かつた。

家庭でもさうであつた。私が日本の古典を讀み出したのは、尋常六年生あたりであるが、誰も私に教へてくれる人もなく、また私も誰に教はらうとも思はず、借覽の書は勿論、家藏の書をも一一手寫した。「竹取物語」「土佐日記」をはじめ、「保元物語」「平治物語」の軍記物迄、何れも手寫した。ことに「竹取物語」は二回も三回も寫しかへたやうに思ふ。寫して居ると、讀んだだけではわからぬ個處も、段段にわかつて來る。そして一つ一つの細かい言葉の相違までもわかつて來る。寫すことは、讀む事を深める最も直接なる方法であつた。寫すことは、讀む立場を書く立場にかへて行く事である。自分を半ば表現面にかへす事である。隨つて最もよく視面にかへす事が出來る。故に表現面の視面への廻轉、即ち讀みの深さ、讀みの實踐は、この手寫によつて最もよく成し得るのである。

私はその後久しいこと、この手寫のことを忘れて居たが、或る時遠藤隆吉先生に、漢文の勉强法を伺つたことがある。先生の御返事は至極簡明であつた。「それは君ね、寫すさ」。ここで私は自分の少年時代にやつた手寫の勉强法を思ひ出した。今の國語教育は、手寫をすててゐる。これが讀みの深さに達し得ぬ一つの理由ではないかと思ふ。私は文の推敲の場合にも、原文を訂正するに止めず、全く別紙に新らしく寫し直させねばならぬと思つて居る。書くことは、單なる受動的な働ではない。稿を新たにするのは、最もよい表現の方法である。讀む場合にも、手寫によつて一語一語を視の面まで還さなくてはならぬ。中世盛に行はれた寫經の習慣も、讀みを深める點に甚だしく貢獻したに相違ない。かくて讀みの深さは、

1. 手寫すること。

2. 手寫によつて氣づき得る些末なる相違を、出來得る限り丁寧に還元すること。

即ち手寫によつて、些細なるものを活かしてくること、これが讀みの深さに到る實踐である。

註。ここには視面として視を中心にして考察したが、これを思惟作用の場合に置き換へれば、思惟面となる。この場合も關係は全く同一である。以下總て同樣である。

二　表現

前の視面の八性質中、その3と4とにあたる段階が、ここでは問題化される。

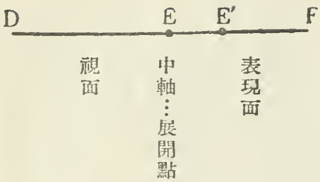
表現形式が視軸によつて直接に支持せられると、表現は特に顯著になり、視面は表現面に變つて行く。ここに言

葉があらはれる。

表現面が堅厚を增大すると共に、表現面は視面から剝離し、視軸を中心にして廻轉し、獨立する。ここに視面は言葉になる。

この二段階は言葉になる直接の過程である。

視面が言葉化せんとする傾向が熟して行くと、表現面として、視軸卽ち中軸が廻轉をはじめる。この廻轉の一點を今展開點と呼ぶ。言葉が展開をはじめる一點である。而してこの展開點の背後には、意によつて貫かれて來た視の面がある。この視面が言葉になる一點は、隨つて意軸、卽ち中軸上の一點である。此處で視面から表現面にかけて、中軸上の一點、卽ち展開點を通ずる橫斷線を作ると、圖の如くなる。



DE 視面。EF 表現面。

E 中軸。中軸上の一點、展開點。

而してはじめの表現の形では、

DE＝EF

であつて、視面と表現面とは、數學的に釣合つてゐる。故に視面が增大すれば、表現面もそれに應じて增大する。然るに日本の藝術傾向なる單純化の要求によつて、E 點を F に向つて移動させることが行はれる。そして新らしい E′ 點を以つて新らしい展開點とする。この場合には

DE′ 視面。E′F 表現面。

E′ 中軸。中軸上の一點、展開點。

となる。ここに於いて

$$DE' > E'F$$

となつて、數學的釣合は破れてくる。然らば視面は重く、表現面は輕いであらうか。視面の増大は、かへつて表現面の貧弱を持ち來たすであらうか。

これに就いては、EE′ の間の性質を考へてみなくてはならぬ。EE′ の間は以前は表現であつたものが、DEの増大によつて、視面に位置を讓つたのである。しかもF點は、EE′ だけの増大にも係らず、位置を動かさない。その結果表現面は甚しく延長を小にし、密度を大にして來る。そこでEE′ はかかる移動上の變化によつて、如何なる性質的變化を受けたであらうか。最初の行動が、今は意志の中に埋れたのである。しかし埋れても埋れて終りはしない。意志を強く動かす動力を持つて埋れてゐる。靜止せる埋沒でなくて、行動せる埋沒である。故にこのEE′ 部は、表現と視との中間にあつて、最も張力の高まつた部分である。背後に視を持ち、前途に表現を持ち、しかも自らは表現たりし部分である。この特殊なる張力を有する部分を豐富に持つことが、單純化の作用である。故に單純化の作用は、これを二つの方向から言ふ事が出來る。

一、單純化とは、表現を視に還元することによつて、張力を増大する作用である。

二、單純化とは、D點及びF點を動かさずして、E點のみをE′點に動かす作用である。

この單純化の作用は、言葉の上に如何なる變化を持ち來たすか。大島正健氏「我大和語の構造」（藝文、昭和六年一月號）

爰に國語の作成に於いて、名詞と動詞と、何れが先出なる可きかといふ、重要なる問題あり。前に出だせる者には、名詞先立の例もあれど、是に由りて一概に他を推し難し。今左に一例としてスといふ音より出づる諸語を擧げて、此問題を考究すべし。スは動きたる物の、落ちつく有樣を示す意なることあり。これ語根なり。之に語尾のムを添ふれば、スムと言ふ動詞を生ず。此動詞は落ち着くといふ意の語を完成す。之を基として、同形にして別義なる三種の動詞出で來る。

其一、スム（濟）は動作の終りて、落ち着きたるなり。爭がスム、仕拂がスムの如し。

其二、スム（淸）は上面の浮動物の降下し、水の濁り無く淸くなりたるなり。濟ムは轉じて澄ムの義と爲り、月がスム、心がスムなどといふ。

ス（洲）は水瀨の落ち着きたるに由りて、生じたる處をいふ。

ス（酢）は酒の浮動物の落ち着きて、淸き液と爲りたるものなり。

其三、スム（住）は處を定めて落ち着きたるなり。

ス（巢）は鳥獸の住所なり。

名詞先出にて、之を語根と爲し、之に語尾を添へて、動詞を生ずるものなりと主張する者あり。此等の人人は、前に擧げたる第三の例に於いて巢を基として、住ムの生じたるものとす。然るときは何故に巢にスの音を與ふるか、之を說明すべき責任を有す。スムは濟ム、淸ム、住ムに共通する同根、同尾の語なり。然るに此三語を互に關係無き、各自獨立の者と見做さざるを得ず。是れ謬見なるべきこと明かなり。

合理の解釋は次の如し。三語に共通するスは、落ち着くといふ空漠なる意を含める語根にして、未だ明確なる意義を有する名詞と稱すべきものに非ず。之にムといふ語尾の添はりて落チ着クといふ意を完成し、次いで濟ム、淸ム、住ムの三種の觀念を表はす、明確なる意義を有する動詞を生ぜしなり。このムは構成語尾の職を務め、語根のスを助けて、動詞の意義を完成す。此等の動詞の意義は反つて語根に移り、語根は更に名詞と爲り、第二の淸ムの場合には洲と醋とを生じ、第三の住ムの場合には巢を生じたるなり。右の例にては、動詞先出にして、名詞後出なること言ふまでも無し。スは語根としては落ち着くといふ朦朧なる意義を有するに止まり、未だ完全なる語と稱すべきに非ず。之にムなる語尾の添はりて、完全なる動詞と爲り、而して其動詞の義を受けて、語根の獨立語と爲るとき、完全なる名詞と爲るなり。故に前に擧げたる巢は、住ムの意を受けて生じたる後出の語にて、住ムはこれが先出の語なり。若し此順序を顚倒することとせば、第二例に於いて洲若しくは醋は先出にして、淸ムは後出となる、奇怪なる結果に到着すべし。語根のスは、完全なる語とは稱し難しと雖も、濟ムにも、淸ムにも、住ムにも、共通の義を含めるものなり。獨り住ムのみを切り離し、濟ム、淸ム、と沒交涉と爲すは、三者の緣起深き關係を見落したるものなるべし。言語の作成に於いて、何れが先出なるか、後出なるかを判ずるは、其の異りたる場合場合に由るべきなり。

動詞先立、名詞後出なる事は、原始的な語る働からも見出せる。例へばここに、「うまうま」と言ふ兒童語があるとする。この場合、この「うまうま」には、樣樣の意味が考へられる。

ここに「うまうま」がある。

「うまうま」はおいしい。

「うまうま」をほしい。

もつと「うまうま」をほしい。

もう「うまうま」はいらない。

「うまうま」を猫が食べさうにしてゐる。

「うまうま」が手についた。

「うまうま」がそこに落ちた。

子供の言つた「うまうま」の意味は、際限もなく多樣である。とにかくこれは、「うまうま」なる、食物なる、單なる名詞ではない。「うまうま」は食物が働いてゐる姿である。「うまうま」は靜止ではない、それは働きを持ち、働く「うまうま」である。「うまうま」は、物事の名をあらはす名詞だけの意味ではない。事物の狀態の表現に向つて傾いてゐる。名を示すと共に、この名を持つものの狀態に對する態度を示してゐる。故にこの「うまうま」は、動詞的性質、或は形容詞的性質を持つてゐる。名詞的性質は外見の形で、その語られる主要の意は、動詞的形容詞的である。それはまだ用言としての語尾の變化などを持つては居ない。動詞的形容詞的の形體を具へては居ない。しかし「うまうま」の指し示す意は、動詞的形容詞的の働である。動詞は動的狀態を示し、形容詞は靜的狀態を示す方向に傾くが、共に狀態の表現である。言葉を作られ終つたものと考へることなく、言葉を作られつつあるもの、働きつつあるものとみれば、「うまうま」が單なる名稱として述べられたものでなく、その狀態と自分の關係を語るものとなつて居る。また名詞とも動詞形容詞とも分かれぬこの子供言葉の中に、既に明瞭に動いて居るものは、動詞的形容詞的意志である。言葉を語る意志であるとみる立場からすれば、この言葉は動詞的なるもの、形容詞的なるものと見る外はない。

動詞・形容詞が原始語の中心形體であると考へられるも一つの理由は、動詞・形容詞は、他の品詞の形體をもふくんで居るからである。名詞は名詞の形しか持たず、助詞は助詞の形、代名詞は代名詞の形しか持たぬのに、形容詞・動詞は、一方に名詞的なる形を持つと共に、他方には助詞・助動詞的なる形を持つてゐる。即ち語根は名詞的性質であり、語尾は助詞的、助動詞的である。動詞・形容詞から、他の品詞を分出し得る形を持つて居ることは、動詞が未だ分化しない形であり、他を分出し得る根源の形であることを示すものと考へられる。そしてこの性質は後に名詞から動詞の作られる場合にも現はれる。即ち勉强・攻撃等の名詞が、勉强す・攻撃す等の動詞になる場合には、名詞は語根の位置を取り、これに「す」の動詞が添つて、語尾の位置をとるのである。しかもこの「す」は、語根語尾の區別が判然としないで、著しく助動詞的である。動詞中最も助動詞的なるものは、この「す」である。この「す」が名詞を動詞化することは、注意すべきである。然るに形容詞が、その靜止的性質を一層顯著にして來れば、副詞的になり、文に於いて副詞的修飾語となるのである。

かかる動詞・形容詞の如き狀態詞は、言語の最初の形なる事が想像せられる。この語根・語尾の生起を先の展開點の問題に還して考察する。動詞「スム」は勿論表現面の言葉であるから、前の圖式で E F の間にある。この E F を更に單純化する爲に、E を E′ に迻つて、表現面を E′ F に縮少すれば、「スム」にもまた內的變化が起つてくる。即ち「スム」は二つの部分にわかれる。そして「ス」は E E′ の間に留り、「ム」だけが表現面に現れる。ここに語根「ス」と、語尾「ム」とが性質的に區別せられる。大島氏は「ス」が先にあり、それに「ム」が結合したと說いてゐられるが、私はこれを逆に考へてゐる。先づあつたのは「スム」であつて、その「スム」が、E の E′ への移動によつて、「ス」と「ム」

とにわかれたのである。そして E E′ に留つた「ス」は表現的には靜止した狀態をとり、隨つて名詞形になる。このE E′ での靜止を一層大にすれば、そのままの位置で「巢」「酢」の如き名詞となる。故に名詞は E E′ よりも、D Eに近い性質、視面に近い性質を持つことが知られる。縮少された表現面にある「ス」が敏活に働いて、表現面で活躍する。これが語尾の活用である。

然るにE′ が更にFに向つて動いて、E″ となつた場合に何がおこるか。もともと E′ F の間にあつたものは、動詞・形容詞の語尾、助動詞・助詞である。助動詞は語根と語尾との區別のない、全體が表現作用になつてゐる點で、動詞・形容詞の語尾と甚だ近い。動詞の中で佐行變格の「す」は、名詞と結合して、自分が語尾のやうになつて働く位であるから、その語根と語尾の判然せぬ點に於いては、助動詞的である。活用も何も持たないで、全身を以つて働くのは助詞である。助詞は形は變へないが、意味の點では非常な廣さを以つて居て、樣樣の場合に働き得る。それは動詞の語尾が時の樣樣な狀態や、他語との結用の樣樣な狀態に適し得ると同一である。(助詞のこの幅の廣さについては後に述べる)。而してこの E′ E″ の間に沒するのは何であるか。

一、助詞。助詞は活用を持つて居ないから、この點で、靜止的狀態をとり易いとみえて、敏活に働くにも係らず、この場合に、E′ E″ に沈んで、一見無表情なるが如くに見える。表現的であつたものが、この機會に沈默する。かういふ沈默が大阪語にあらはれてゐる。谷崎潤一郎氏が東京語と大阪語とを比較して、注意せられたのはこの點である。谷崎氏は、東京語では「私は」と「私では」とを明瞭に使ひわけるのに、大阪語ではこの區別なく、「うち分れへん」といつて、「は」「では」の助詞を省略してゐる事を指摘してゐられる。しかし大阪人には、

「は」と「では」の區別がわからない譯でもなく、またそれを區別して使ふ必要がない譯でもない。それを大阪の好によつて省略してゐるのである。大阪にそれが無くて現れないのではない。あるにも係らず省くから、E′ E″の起伏の味がある。それだからまたAより B′ C′ に斜線を下す事が出來る。もし助詞がないなら、ここに斜線を下して、言葉の味の深さにふれる事は出來ない。

二、助動詞の部分的埋沒。

「六種の活用形を完備してゐるものは、下二段型活用の六語と、ナ行變格型活用の一語と、ラ行變格型活用中の三語を合せて十語にすぎない。その他は、

未然形を缺くもの八語　　連用形を缺くもの七語

已然形を缺くもの一語　　命令形を缺くもの十七語

である。而して右の活用形の缺如は二つ以上を兼ねるものもあつて、活用形は動詞・形容詞に比して著しい變體を呈してゐるといはなければならない。」（本講座木枝增一氏「文語法精說」）

この傾向は口語に於いて一層はげしい。例へば打消助動詞の

「ながら」は未然形・連用形の二形　　「まい」は終止形の一形

のみを持つて居る。然るに「まい」は文語の「まじ」に相當するに、「まじ」の方は命令形を缺くのみで他の五形を持つてゐる。また未來の助動詞の

「う」終止形の一形　　「よう」終止形の一形

のみである。ここに埋沒したのは口語助動詞の命令形である。
命令形有るもの。受身、使役、崇敬の三。
命令形無きもの。可能、打消、時、推量、指定、希望、比況の七。
命令形の無いものが多い。然るに文語では
命令形有るもの。受身、使役、崇敬、指定の四。
命令形無きもの。可能、推量、希望、咏嘆、比況の五。
命令形の有ると無きとの兩樣なるもの。打消、時の二。
であつて、埋沒の傾向は口語に多い。のみならず、口語では咏嘆の助動詞を失つてゐる。
かくの如くして、E點の再度の移動によつてなされた表現面の縮少作用は、言葉の表現を單純にして來た。しかしこの單純化はEE″の間にある言葉の味によつて、言葉の態度そのものを高めて來た。

信州小諸に居た頃私は弓をやつたことがある。誰でも最初のうちは、的に向つて矢を當てることばかりを心掛ける。唯當りさへすればいい。左樣いふ時代には、幸に一本の矢が的を貫くことはあつても、他の矢は思ひもよらぬ場所へとんで行く。射手の心に頼むところもなく、矢の曲直を辨別する力もなく、さうして幸に當つた矢は高慢で煩い「熟練」を思はせるばかりだ。小諸に住む舊士族の一人で、弓術に心得のある老人が私達の矢場へ來た。その老人が先づ「姿勢」を正すことを私達に教へてくれた。それからの私達の矢は、假令的を貫くことが出來ないやうな場合でも、一手揃ひで同じ場所を行くやうになつた。これは文章の道にも宛欲めて見ることが出來る。唯好き文章をのみ作らうと思つて焦心することは、決して目的を達する道ではない。

眞に好き文章を作らうと思ふものは、どうしても先づ自己から正してかからればならない。（島崎藤村氏、飯倉だより）

この「姿勢」を正すといふことは、言葉の上には様様にあらはれるが、これを展開點 E E′ 等の場合に持つてくれば、この「姿勢」の問題は、E E′ 更に E E″ の間の問題になる。「姿勢」を正すとは、E′ F 或は E″ F の間の問題でなくて、隱れたる表現性 E E′、E E″ の問題である。言葉の「姿勢」を正すとは、このかくれたる表現性を以つて、現れたる表現性に働きかけるやうにする狀態を言ふのである。この狀態は、後をふりかへつてみれば、表現 E′ F 或は E″ F と E E′ 或は E E″ とを一致せしむることである。更に之を遡元すれば、表現と視とを一致せしめる事になる。常に表現を背後なるものに還して行く事になる。故に單純性の傾向の進行は、同時に姿勢を正すことを伴はなくてはならぬ。

この事は東洋の敎養のすべてに通ずる態度であつて、佛者の食事は、

上分三寶、中分四恩、下及六道、皆同供養。

である。己のとる食は上は三寶に、中は四恩に、下は六道に、卽ち世界の一切のものと、一切の德に向つてこの食を分ち、供養するのである。

一口爲斷一切惡。

二口爲修一切善。

三口爲度諸衆生、皆共成佛道。

といふ心である。一口は一切の惡を斷絕し、二口は一切の善を增進し、三口は一切の衆生と共に佛道を成就するので

ある。食がこの姿勢によつて高められて來る。この姿勢によつて、人生の高い精神生活に參與する。言葉もこの姿勢によつて、高い精神生活に參與する。言葉の單純性は、ここまで生活を高めて來なくてはならぬ。この生活の高學に貢獻するのは、展開點の移動である。

註。美術に於いて、かかるE點の反復的移動を行へば、色の畫から、線の畫乃至墨の畫になる。東洋の美術史は長い苦心の末に之をなし遂げてゐる。

三　言葉の幅

言葉を聞き或は讀むのは、言葉の辭書的解釋を聞き、或は讀むのではなくて、その言葉の產出せられたる根源を、聞き或は讀むことである。而して言葉の產出せらるる根源は、語らんとする意志である。視面を貫いて來た意志である。卽ち之を圖式的にいへば、中軸である。この中軸を聞き、讀むことである。如何となれば、言葉より先に意志があるからである。隨つて語ることは、言葉を語るのでなくて、語らんとする意志を語るのである。聞くのもその意志を聞くのである。意志を離れた言葉は無意味である。そのかはり意志が充實して居れば、一般的文法的には破格の言葉であつても、人の心情に訴へる力がある。

聖人國を治め給ふ時は、風雨時に從ひ、天は天の德をあらはし、地は地の德があらはれます。（鳩翁道話）

この語法で、はじめに「德をあらはし」とあるから、一般的の對應の習慣から言へば、「地は地の德をあらはします」がよい。しかしこの表現の中に注意すべきは、語りつつある間に、意向の變遷があることである。「天は天の德をあ

らはし」と言つた時と、同一の意向であるならば、「地は地の徳をあらはします」と言ふのである。一般の句法とは、意向の變遷なき事を豫定してである。しかし若し語りつつある間に、意向が變化したならば、その變化に應じて表現の上にも自然に變化が現はれる。これは現れるのが自然である。書く時よりも、語る時の方が意向の變化が多い。實踐的に人に對してゐるからである。そこで語る言葉の速記をみると、文章としては可成り格のくづれて居る事を感ずる箇所が多い。にもかかはらず聞いてゐる場合には、少しもその壞れに氣がつかない。意向の變化を語勢の上や表情の上に見て居るからである。その變化を示し裏づけるものを見るからである。意向の屈折による句法の屈折は自然である。然らばこの場合にも、この句法の屈折を、ここに讀みとることは出來ないであらうか。そしてその意向の屈折を讀みとらば、この句法は破格であるからとて、棄て去らねばならぬものであらうか。吾等が聞きよむのは、一般であるから聞きよむのではなくて、特殊であるから聞きよむのである。隨つて最もよく語る人は、最もよく異る語り方をする人である。

夏の夜のいぎたなくとも、大八に衣推し脫がして、寢冷えして風ひかし、煩し給ふな。(南總里見八犬傳)

これについても、一般的句法から言ふならば、「衣推し脫がし」、「風ひかし」とあるから、「寢冷えして風ひかし」でなくて、「寢冷えさせて風ひかし」でなくてはならぬ。ここでも意向の屈折を讀み取るならば、この屈折の故に、また特殊の味がある。ここに一般のものなしとて、その故にのみ非難する事は出來ない。

家居のつきづきしくあらまほしきこそ、假りの宿りとは思へど、興あるものなれ。(徒然草)

これについて、「しくあらまほし」は無駄で、「家居のつきづきしきこそ」とあるべきである。「家の相應なることそ興

あれ」といへば聞こえるが、「相應にありたい事こそ與あれ」では埒があかぬ。察するに兼好の消し損ねであらうといふ意見がある。實にその通りである。しかしこれも「家居のつきづきしきこそ」と言つて居る間に、いつか自分の希望が混入して、「家居のつきづきしくあらまほしきこそ」と、自分の願望の形で言つて仕舞つた。さういふ自己の混入も亦、自然で面白い。かういふ屈折の間に、この書いた人の心の姿も見える氣がする。この心の屈折の故に、人の心の姿がありありと見ゆる例は、「萬葉集」にも多い。例へば

紫のにほへる妹をにくくあらば人づま故に吾戀ひめやも

の如きも一例である。この屈折の中に、人づまを戀する心の情熱と欝積とが見える。

かういふ論理的矛盾によつて、かへつて心の姿の見えるのは、その論理的矛盾を生ぜしめた背後の必然性を感ずるからである。表れたその儘の形には矛盾があつても、その矛盾を表し出した背後には、必然なるものがある。矛盾がよいのではない。矛盾を犯かさしめし力によつて、かへつて心の姿を知り得るのがよいのである。この場合の矛盾とは、一般的・文法的の矛盾である。しかしこの一般的・文法的なるものを犯すのは、その場合の實踐的特異性である。

言語の背後の性質を考へれば、それが前に語られたと全く同じに語られる場合は考へられない。必ず前の何れの場合とも異つてゐる。隨つて言葉は、その言葉が前に語られた何れの場合とも異つて、語られて居る。號令でさへも、時時に異る。全く同じに響く號令はあり得ない。それから受ける感受も亦、全く同じことはあり得ない。語られる度に前の言葉は變形せられ、修正せられ、新らしくせられる。故に語る事は襲踏でなくて、新生である。創始である。同一の語がそのまま二度語られる事はない。同一の言葉はおそらく生涯に一度語られるばかりであらう。

寶生九郎氏は「謠曲口傳」に於いて、能は五年前の「羽衣」も、今日の「羽衣」も、五年後の「羽衣」も、寸分違はぬものでなくてはならぬと言つてゐられる。しかしそこまで能を變化させずに守つて行かうとして居ても、しかし五年前のと、今日のと、五年後のとは、全く同じではない。背後のものが同じでないからである。そこにその度に新らしく生れかへつて來る新らしさがある。命のこもれるものは、舊くは成り得ない。

故に語ることは、共通點でするよりも、異質點でする。異質點でしながら、それが何故に理解せられるか。これは聞く人も、亦、言葉の創造をなし得るからである。聞くことは、語る事と相通ずる。よく聞くもの、所謂、聞き上手は、同時に語り上手である。隨つて、吾等が人の言葉を思ひ出す時には、きまつてその人の特色ある語り方を思ひ出す。言葉が生きて居るのは、その異り方によつて居る。

語る事は、思惟や視が言語と結合するのではない。視面乃至思惟面が言語と結合するのではない。視面や思惟面ははじめから、言語である。視面や思惟面の表現性が、ある度迄發展すれば、中軸による廻轉を以つて剝離する。そしてこの剝離による表現によつて、一層視乃至思惟は發展する。語らねば視は發展しない。語らねば思も發展しない。語ることによつて視も思も發展する。

語ることは、思視が言葉となることとであるが、それ迄無關係であつたものが、成立にあたつて、ここで突然結合をはじめた譯ではない。はじめからあつた傾向が自律的に展開したのである。一層著しく展開したのである。その表現の展開が十分見えて來ると、もと別別にあつたものが、今新らしく結合したかの如く見える。しかしこれでは成立關係が逆であつて、視思との結合でなくて、視思よりの剝離である。結合して言葉が顯著になつたのではなくて、剝離

して顯著になつたのである。思視ははじめから言葉の形をとる。しかし思視の微弱な時は、言葉も亦微弱である。思視の混沌たる時は、言葉も亦混沌である。もし言葉になり得ぬ思視ならば、後迄その思視は言葉にはなり得ない。

かくて言葉は思視による發生である。思視は時時による特殊である。故にその發生たる言葉も亦、時時による特殊である。思視の特殊性による新生である。故に言葉は常に新らしい。感嘆詞は單純極まる形を持ちながら、人の心に直接するのは、思視との剝離性が少く、思視と直接し、また他の思視とも直接するからである。聲にあらはれぬ言葉さへ聞く事が出來る。最も思視に直接するからである。言葉を聞くのは教育ではない。言葉を聞くのは天賦による。相互の思視の自らなる一致によつて聞くのである。先驗的なる一致によつて聞くのである。しかし剝離後の言葉は、先驗性だけでは聞き得ない。そこに教育の力が働く。先驗的一般性の上に更に後天的一般性が繼がれねばならぬ。教育はもともと特殊性を目ざすものでなくて、一般性を目ざすものである。この後天的一般性によつて、剝離後の言葉の表現は聞き得らるるのであるが、その中軸をなすものは、依然として先驗的一般性である。教育によつて聞くのであるが、教育を貫くものは、この中軸である。言葉を新生させる中軸の力を持たぬものは、新生せる言葉を聞くことは出來ない。隨つて語ることが自己を語るのであるやうに、聞くことも亦自己を聞くことである。自己によつて聞くことである。自己によつて他を聽くことである。故に聞手を離れて語ることはなく、話手を離れて聞くこともない。話手から直接に聞手に連るものは、話さうとする意志である。思視が言葉にならうとする意思である。きれぎれの音聲ではない。きれぎれの音として聞かず、一つのまとまつた意味として、まとまつた思視として聞くのは、この言葉たらんとする意志である。この意志は中軸であり、中軸は展開點である。この展開點 E に立つことによつて、聞き

もし、語りもし得るのである。故に聞と話との間の共通點を求むれば、Eに達する。このEによつて話手と聞手とを連絡せしむるのが、言葉の働きである。このE點連續が古來言葉のたましひ、即ち「ことだま」である。言葉が生きてゐるといふのは、このE點連續の作用をいふのである。

言葉は思覗の展開であるから、言葉は變化と動搖とを常態として居る。いはば波の如きものである。波の形を氷結せしめれば、それは既に波ではない。言葉を氷結せしめれば、既に言葉ではない。水の形は千變萬化、極りなしといつても、しかしそこには自ら一つの限定がある。正方形の波や、矩形の波は立ち得ない。松葉の様な波や、櫻の枝の様な波は立ち得ない。如何なる變化の中にも、波を支持する一般性はある。言葉はまた歩行にも比べる事が出來る。歩行は一歩、一歩、必ず時によつて同じではない。履物と、地の高低と、見て行く周圍の狀態とで、一歩一歩同じではない。同じ一歩を踏むことは、生涯にもあり得ない程、一歩一歩は異る。その異る間に、また自ら共通するものがある。二本の足の運動の形や、足の向きや其他に、共通のものを見出すことが出來る。かくてこの一般性と、一般性の動搖、これが言葉の姿である。動搖に着目すれば、言葉の幅がある。一般性に着目すれば、言葉の定位がある。

言葉の持つ幅に就いては三つの場合が考へられる。

一、言葉の一般性として持つ幅。

二、言葉の動搖性として持つ幅。

三、文の構成上に持つ組織としての幅。

一は、言葉が辭書的に持つ幅、即ち言葉の多義である。今その著しい例として、動詞「や」をあげる。

1. 「有りや」の「や」の如く、疑惑の下にあつて内省する性質。

2. 「赤い花や白い花」の「や」の如く、存在を關係的に重ねて列擧して行く性質。

3. 「君のあるくに似る人もあへや」の「や」の如く、似たる人にあはんことを希望する性質。

4. 「鳴けや鳴け鳴け」の「や」の如く、鳴かんことを希望し、希望の心を基礎に置いて、鳴かんことを要求する意志表示の性質。隨つてこの形は、その初期形として、3の希望形を持つて居る。3は希望を示しながら、しかもその中には、微かながら、自分自身に命令する心持がある。この希望の中にひそむ命令の心持が發展して顯著になれば、ここに希望より要求に進行する心の陰影が生ずる。この形が一層高度になれば5の形になる。

5. 「思ひきや、雪ふみわけて君を見んとは」「心なく雲の隱さうべしや」「行かざらんや」是等の三例の示す「や」は、一般には反語と稱せられる。上の記述を一擧にして顚倒し、全然反對なる樣狀を表示せしむるのが反語である。この中第一の例は、この雪路の中にして君に遇ふ豫期は全く持つてゐなかつたので、その意外なるに驚いたのである。しかしその中には、君を見んとは思はざりしとの意志表示があるだけで、それ以上のものはない。この場合の意志表示は低度である。然るに第二の例にあつては、雲の隱すことを希望せず、隨つてその希望に反して、雲がわが顧る山を隱すことは有り得ないといふのである。その中には雲に向つて山を隱すべからずと要求する意志が示されてゐる。ここには他をして自己の意志に服從せしめんとする高度の意志表示がある。第三の例の示す意志表示は、如何なる障害の中にあつても斷然行くべしとする意志の高度を示すものである。故にこの「や」の意志表示は最も高き意志表示である。かくて言ふ處を一擧にして飜して、新らしい斷定をうる

處に、最初からの斷定の及び難い最高の意志表示がある。

故に「や」の示すものは、1の疑惑にはじまつて、2の列擧に進む。列擧は疑惑ではない。認定せるものを重ねるのである。その認定は更に要求の形の之に加はることによつて、希望と要求とを通じて、最後にして最高の意志表示となる。疑惑はもとより障害であり、躊躇である。然るに「や」はこの疑惑から認定に入り、更に普通の肯定ではなし得ない最高度の肯定をなしてゐる。かかる推移を示す「や」がある。

6. 「や、誰ぞ」。この「や」は疑惑の態度によつて呼びかける性質である。そこには呼びかけるものよりも、疑惑を明かにしたい心の方が勝つてゐて、第一の疑惑を示す性質の「や」と甚しく接近してゐる。然るに「太郎や」の「や」は、そこに居るものが、太郎なることを肯定して、その上で太郎を呼んでゐるのである。前者は疑惑を肯定にかへようとしてゐる呼びかけであり、後者は肯定の上に立てる呼びかけである。この呼ぶ働の「や」は、それ自身の中に、疑惑から肯定に推移する變化を示して、「や」の全體の推移層の縮圖をなしてゐる。

以上の如くにして、疑惑と最高度の肯定との間の幅は、人間意識の全範圍を包含するものである。認定をうたがふ言葉が、如何にして認定の斷然たる認定、卽ち何者も之を妨ぐること能はざる高度の認定をなし得たのであらうか。これは人間の認識としては困難である。この困難をあへてしてゐるのが、「や」である。疑惑ならば認定ではない。認定ならば疑惑ではない。Aは如何なる場合でも非Aではない。この論理的性質を、容易に破棄する非論理性の上に成立してゐるのは、この「や」である。

もし産出の作用が、かかる矛盾を超越するならば、この被産出は、最も高度の幅を有すべきである。疑惑と共に最

高度の肯定を持つことは、同時には困難である。故にこの幅を一つに決定せんとする要求が生ずる。かくて「や」の不確實の確實、不安定の安定を得る。ここに意識の起伏がある。意識は同一の平面で、この幅を決定することは出來ないから、幅を幅として持ちつつ決定する。ここに起伏がある。ここに感嘆詞の「や」を生ずる。

7. 「おしてるや難波の崎」の「や」は、言調を整へるものとされてゐる。「おしてる」の四音を「や」によつて五音にする。しかしこの「や」は、それだけで積極的の意味はないものとされて居る。けれども「や」が整調作用に役立つといふことは、有つてもよく、無くてもよいといふ程の形では、出來得ない。表面には働なしと見えても、その背後には「おしてる」と「難波の崎」とを一傾向に決定する力を有たなくてはならぬ。卽ち「おしてる」の傾向と、「難波の崎」とが積極的に一致を成立せしめなくてはならぬ。而して「や」がこの力を有するのは、「や」が中に複雜なる起伏を有することに基く。複雜なる起伏を有すればこそ、他の言葉の中に入つて、統一作用を完成せしめ得るのである。換言すれば感動の定位に與かるのである。故に働なしと見ゆるものが、實にその背後にありて、かへつて敏活なる働を有するのである。

その働がもつと盛になつてくれば、「奥の細道」の「閑さや岩にしみ入る蟬の聲」「よもすがら秋風聞くや裏の山」の如き「や」になる。この「や」には疑惑から低度の肯定をとほつて、高度の肯定にいたる幅の起伏の全體がある。最高の肯定にして猶且疑惑を捨てず、最低の肯定にして猶且最高の肯定に參するのが、この起伏である。ここに感慨がある。疑惑を有ちつつ肯定する。肯定しつつ猶疑惑を捨てない。そしてその幅の中を振動してゐる。ここに「や」の感慨と感嘆とがある。

是を要するに、「や」の意味は、もともと疑ひである。「有りや」の如くに、有ることを疑ふのである。この疑問は展開によつて肯定に動いて行く。點が展開するのと同一である。第一の展開は反語化である。「思ひきや」の如く、そこにあらはれた形では、依然として疑問であるが、その疑問の中に、既に奪ふべからざる肯定の意味があつて、疑問は一轉して强い肯定に轉回する。これが反語である。その第二の展開は平淡な肯定である。反語の中には疑惑の形を持つてゐるが、これは全く疑惑を持たない平淡な肯定である。「太郎や次郎や」と重ねて行く累積であり、或は「太郎や」と呼びかける呼懸である。何れも自分以外の系統のものを、自分の意圖とする一つの系統に統一しようとする働である。かういふ系統化の肯定の後に於いて、第三の展開をする。「明月や」の如き感嘆がこれである。感嘆は一層高い肯定であつて、それには甚だ强い感動が結合してゐる。而してかかる展開を通じて働いてゐるのは、疑問の「や」にあつた重壓で、それは「思ひきや」の反語の中にもあり、「明月や」の感動の中にもある。かういふ重壓が、先の「閑さや」であり、また「秋風ふくや」である。疑問の「や」は素朴なる重壓であり、感動の「や」は展開せる重壓である。かかる重壓の味の差は、之を同様なる展開をなす「か」に就いてみるも明かである。かくて幅の未決定と、その未決定を一に決定するものとのこの二つの性質があつて、日本文學は内的なる起伏を持つのである。世に餘韻と呼ぶのは、この起伏の系統である(この「や」についての項は、小著「東洋美學」より)。

以上「や」について比較的細かい考察をしたが、かういふ幅は、可成り多い。

助詞の中で反語になるもの、「や」「か」「やは」「かは」等は、すべて疑問の助詞「や」「か」と同一用法である。何

故この疑問が反語となるか。「誰か知れりや」は疑問であるが、「誰か知るものあらんや」は反語である。反語の場合は文の組識で下に否定が用ひられてゐる。「や」「か」等に確定の意味のない時に、下の否定の彈性が強いから、その反撥力が眼立つてくる。これが反語である。かく、「や」「か」が確定意味を持たぬ場合に、他の態度を通過成熟せしめるので、その通過したものの性質によつて、自分が改變せられる。これが反語の意味である。故に反語はこの意味に於いて、辭書的性質でなくて、文の構成上に持つ幅であり、しかもその構成上の幅たるや、「か」「や」の動搖性に基いてゐる。然らば幅の問題は、はじめに、一般性、動搖性、組織性の三つに分類したが、實はそれが互に關係しあつて居るものであり、隨つて言葉の多義も、この相互交錯の上のことである。

「ば」に假定の「ば」と確定の「ば」がある。假定の場合には、「雨降らば行かん」の如く、動詞・形容詞・助動詞の未然形を受けてゐる。その構成上に假定が出てくる。然るに、確定の「ば」は、動詞・形容詞・助動詞の已然形を受けて、「雨降れば行かじ」の如くに、その構成上に確定が出て來る。この場合、「ば」自身は兩者を同一の關係で示し得る。何故示し得るか。「ば」は未定形であつて、上にくる傾向を受けて、それを確定する働を持つてゐるから、決定したものは構成的に上に來る傾向のものである。未然形ならば假定、已然形ならば確定と、その傾向を確定した迄である。自己を未決定にして、自己の受けた傾向を、決定的にするのである。幅の立場でする決定である。

助詞から幅の例をも一つ擧げると、「と」がある。「繪に畫くと、筆も及ばじ」は假定、「山と水と、その美、筆も及ばじ」は並列、「雲行きて雨となる」は指定、「誰かあると召し給ふ」は段落を示してゐる。かくの如くに「と」は假定、並列・指定・段落の如き各種の性質を持つてゐる。しかしこれとてもその間に一般性が無い譯ではない。第一に一度上

の構成をそこで中止せしめる。第二にその中止を再び下に續ける。中止したものを靜かに下に渡すのである。これも自己は未決定的であつて、構成上の連絡機關となる性質が著しい。故に幅を持つとは一般性としては、自己の立場が未決定で、構成上の被通過性を有することを要するのである。幅はここには一般性と構成性とに關する。

助動詞「る」「らる」は、受身・可能・崇敬の三つにわたつて働く。「犬に噛まる」は受身、「猶一里は歩まる」は可能、「母上は今日見舞に行かる」は崇敬である。「らる」に於いても同一である。

助動詞「べし」は、可能・推量・判定・命令・決心の五にわたつて働く。「猶鐵をも斷つべし」は可能、「明日は雨ふるべし」は推量、「適材を適所に置くべし」は判定、「勉强すべし」は命令、「今後斷じて爲さざるべし」は決心である。而して可能と決定、或は可能と命令との如きは、論理の概念關係でも可成りの幅を持つてゐる。

助動詞「なり」。「秋の野に人まつ蟲の聲すなり」は咏嘆である。「なり」はもと指定の助動詞である。指定の助動詞は體言に連續するのが、その本來である。働の根據が體言的にあらはるるからである。「孝は百行の本なり」の如くである。動詞・形容詞の場合には、連體形からつづく。これは助詞形容詞を、體言的に確定して、それに連續するのである。然るに詠嘆の場合には、動詞の終止形から續く。動詞の終止形は現在であり、現在は視の形の上に繼續の不動としてあらはれるからである。この現在の不變形に對する感動である。この點に於いては狀態の不變を指示する指定の場合と同一である。かくて「なり」は現在によつて代表せらるる不變なる力の存在に對して咏嘆するのであるが、同じ咏嘆でも過去に向つてする「けり」の如きがある。「けり」はもと過去の助動詞であるが、「あやしきものは心なりけり」といふ場合には、過去を示すと共に、咏嘆を示してゐる。過ぎ去れる過去に對して、咏嘆してゐる。故に咏嘆は

何に對してもなし得る。卽ち咏嘆の幅も廣い。また時の助動詞が、咏嘆の助動詞になり得るこの幅も廣い。

口語動詞・口語形容詞は、文語の已然形を假定の意味にする。「行けば」「死ねば」の如くである。形は單純になつたけれども、動詞のふくむ意味は擴大されて來てゐる。

また漢語或は他の語が、「す」と結合する場合に、文語の場合には、サ行變格活用であり、口語の場合には、サ行變格活用・上一段活用・下一段活用・四段活用の何れかになる。しかもその活用は個個の語について知る外はない。この事は動詞の活用が細かい細部を持つことと、變化性の增大とを示すものである。故に一方で單純にするかと思へば他方で複雜にしてゐる。推敲鍛錬の結果は單純になる。同時にやがて推敲鍛錬をうくべきものは、一先づ複雜になる。而して幅はこの一時性複雜化と異るもので、推敲鍛錬を經て猶持つてゐる複雜者である。故にこの複雜とは、要するに未決定性といふことである。隨つて幅とは大なる未決定性である。

日本の言葉の幅、卽ち未決定性は、文の構成の上にも著しくあらはれてゐる。日本の語序では主語と述語とは、文の兩端にあるのが、普通の形體である。主語と述語とが、何れを上下にしてもよいが、直接に結合してゐる形態は倒置法として、特殊な形體である。激情を示した特殊の形體である。この點で日本の語序は支那・歐羅巴等の形態と著しく異つてゐる。

昨年私は家の四つになる男の子に、猿蟹合戰の話をした。じつと聞いて居たが、話が終つてから、「もし猿が來なかつたらどうする」と私にたづねた。栗は火鉢にかくれ、蜂はお勝手にかくれ、臼は屋根にかくれてゐても、猿が來なくては何にもならない。來たらよいが、來なかつたらどうするか。栗ははじけて灰をとばすことは出來ないし、蜂

も飛び出して刺す事は出來ない。話は自然そこで停滯してしまふ外はない。この問は如何にも尤な問である。しかし話が折角ここまで進んで來れば、どうしても、猿はそこに歸つて來なくてはならない。意志の要求の當然として、猿は歸つて來なくてはならぬ。しかし事實問題としては、歸つて來ることもあり、歸つて來ないこともある。當然の問題と、事實の問題との間の矛盾が、この質問である。四つ位の子供でも、かく感じ得るのかと思つて、私は子供の顏を見た。

かういふ思視曲折の樣樣は、いつでも日本の言葉に示されて居る。日本の言葉の組織では先づ主語が首位にある。次に補語がある。述語が末位にある。そして、補語はまだ思視によつて貫かれては居ない。思視はまだ曲折もしないし、またあらはれもしない。言葉の背後にあつて、そのまま繼續して居る。例へば

今日は朝から曇つて居

まで、文語「今日は」から繼續して來て、「居」の下に不確定な狀態が殘つてゐる。しかしそれだけに、「朝」にも、「今日は」の味がしみこんでゐる。朝も曇も味はれて來て、「居」で曲折する。その方向は大體四ある。「居る」か、「居るか」か、「居ない」か、「居ないか」かである。そしてその三者は全然別の表現である。他の國の言葉では、否定、或は肯定、或は疑惑の方が先にあらはれて、態度は先づきまり、補語は更にこれを決定して行く。結論が先に出て、結論の下に次次と言葉が組織されてゆく。そこには最も明瞭な思視露出の論理がある。文のはじめから、それが疑であるか、否定であるか、肯定であるかわかつてしまつてゐる。何とも意志の表示をしないで、ずつと最後迄續いて行つて、最後に一氣に意志表示になるのとは、ひどくちがつて居る。意志は最後まで言葉の背後に隱れてゐる。先づ曲

折してその後に續くのでなくて、續いてその後に曲折する。この隱れて働く意志、この消極的にみゆる意志、これが日本の意志である。

例へば英語の語序は、最初から態度を明示して、之を後から漸次に精密にして行く。卽ち特殊より一般に入る。然るに日本の語序は之とちがつて、全體の態度を先づ未決定の形で保留し、漸次に限定せらるべき資料、卽ち補語を提示し、聞手の判斷を導きつつ、聞手と共に進み、判斷の資料が出そろつた處で、徐ろに態度を決定する。そこに未決定なるものが漸次に形を明かにして來る經過がある。卽ち一般より特殊に向ふ限定作用である。この經過は最後まで一つの狀態としてあらはれ、論理組織としてあらはれない。第一に態度を明示し、その態度を漸次に組織化する論理的組織とは異るものがある。故に日本の語序は狀態的組織である。狀態の中で聞手と共に進み行く姿は、謙抑なる心を生ぜしむる。

日本語には、數量の單複もなく、僅かに名詞に多、諸、少等の修飾語を附して、之をあらはすのみである。如何に外國語が入つて來ても、「人」の下に「ス」をつけて、人の複數とするやうな形は出來得ない。修飾語をつけるとしてもしかもそれは便宜的で、必ずそれを附けなければならぬ强制的な態度はない。そしてこれも名詞に限るもので、動詞にはない。これは日本の言語が、表現の論理的明晳を、必ずしも意志しない故である。大體を示し、大體の方向を示すを以つて十分とする狀態的組織をとる立場と同一である。また文の論理性とは何等の關係のない係結などがある。「此はよろし」「此ぞよろしき」「此こそよろしけれ」の如き三樣の係結は、論理的には結局同一である。枕詞・接尾語・接頭語の如きも同樣に、文の論理性には無關係である。その存在理由は、狀態の感情的組織に關係をもち、基礎

をもつのである。故にこの狀態の感情性を重じて、論理性を重じないものとすれば、自然に數量的狀態は、必ずしも重からず、文の組織から閑却されることになるのである。これは語序と全く同じ性質である。かくてその文の組織に於ける感情的性質、未決定的性質は、論理的性質の決定性なるに對して、多くの幅を持つてゐる。幅とは未決定性を言ふに外ならない。而してこの未決定性は國語にあらはれるばかりでなくて、水墨の上にもあらはれて、畫面の餘白尊重となり、水墨基調となつて居る。そこには互に共通せる消息がある。

四 言葉の定位

言葉の幅は最初よりあつたのか、それとも一語一義であつたのか。言葉の最初は名詞動詞の區別、即ち主語述語の區別もなく、一語が動詞的述語的に働いてゐた。「にやあにやあ」といへば、「猫が居る」「猫がくる」「猫が行く」等の場合の何れをも指してゐて、その何れであるかは、言葉に附屬する身振その他で理解せられるのである。それであるから、主語述語の區別が出來、名詞動詞等の區別のついた後にも、なほその一語は一義を限定するのでなくて、それに通ずる同種の多くに通じ用ひられたに相違ない。そして之に働く限定作用によつて、一語一義となる。おそらく眞先に一語一義となつたのは、身振等にて限定の困難である名詞であつたに相違ない。名詞は直接に指さす外は、これを身振その他であらはすことが困難であるから、これに對して最初に限定作用が加はつたに相違ない。隨つて一語一義となる。それ故に語の增加は名詞に行はれる。物の增加と共に言葉も增加しなくては、一語一義が保てない。隨つて外國語の移植も亦、名詞に行はれる。助詞や助動詞には移植されない。名詞は物の增加と共に增加する（外國の

名詞は運動競技・料理等の世界に一番容易に入つてくる。これはそれに從事するものの氣質による)。名詞は一方に於いて飜譯しがたい。その物が無かつた場合には、その名詞も同時に移植される。ランプの移人と共に、ランプの名詞も移入される。外國語が動詞に移植される場合には、常に動詞「する」の語尾を受ける習慣である。これは國語の同化作用である。「パスする」の如くである。しかし「サボる」の如く、「サボタージする」を省略した上に四段活用にする事もある。しかしこの例は少い。とにかく動詞にはもう外國語が入りにくい形になつてゐる。代名詞・副詞・接續詞・助詞・助動詞等には殆ど外國語が入らない。人間の意志の方向は多端ではない。隨つてこの方向には語彙は增加しない。意志を語るのは名詞ではない。名詞には語彙の增加があるが動詞・助詞等にはない。語る働、卽ち限定作用は、助詞・動詞等にてするけれども、名詞は語られる働であつて、限定をうける立場にゐる。限定する立場はもとより複雜ではない。故に動詞・助詞等の世界はもともと固定性であつて、語彙の增加のない世界である。ここは多義であつて、その幅を彈力的に使ひ得てゐる。故に言葉の限定作用は、名詞に對しては、言葉の形の上に固定的に働いて、一語一義に固定する。しかし他語は語形の上に限定作用が行はれるのでなくて、語の表現作用の中で、限定作用が行はれる。名詞は表現面では固定してゐる。動詞・助詞・助動詞等は、辭書的には多義であるが表現的には一義である。使ふ働の中で限定作用を受ける。故に限定作用の言葉に對する働き方は二種あることを注意しなくてはならない。

前述の如く、未發達の言語は、限定性が少い。限定作用が働くことは、表現面の訓練である。名詞と動詞とに形の上の區別なく、兩者は動詞的形容詞的の狀態を持つてゐた。それが分化をしはじめると、語序があらはれる。語形の上に旣に限定をうけた限定完了語が中心になる。これが主語である。それを更に限定する限定語が、限定完了語に先

立つ。これが修飾語である。次にその限定完了語の作用傾向による限定語が、その後に來る。これが述語である。しかし初期の限定作用では、限定完了語とその限定語「美しい花」と、限定完了語とその作用傾向による限定語「花美しい」とは、その間に區別がない。限定作用が甚しく微弱である。そこでこの語序における「花」と「美しい」と、何れが表現的に重いかといふ問題がある。表現とは限定に限定を重ねて行くことであるから、表現は「美しい」といふ限定語である。語序の先後はこの場合あまり問題ではない。表現としては「花」は既に限定を完了してしまつてゐる。この限定をうけた花が、どうであるかが表現の目的であるから、次にくる限定が重要である。ことに日本の語序においては、後にくるもの程、限定作用が重要になつてゐる。「花」について「美しい」といふのであるが、しかし語る目的は、それが「花」であるかないかを問題にしてゐるのではない。美しいかどうかを問題にしてゐるのである。故に「花」は表現の目的にはならぬ。「美しい」が目的になる。ここにあるものが「花」であるかないかが表現目的ならば、限定完了語は「これ」である。そしてこれはもう既に限定をうけてゐて、表現の目的にはならない。「花である」かどうかが問題である。で「花」は作用的傾向的に自分の身を傾けて、「これは花」となる。「これは花でない」になる。かういふ形で「花」は限定作用に立ち入るのである。

かかる限定作用の微弱な時には、動詞にも時の限定作用がない。副詞などを加へて、過去或は未來を示す限定作用もない。僅かに昨日、明日の如き語を添へて時を限定するに過ぎない。であるから非常に一般的であつて、限定作用は微細である。認識の進むに從つて、限定に限定を加へて行く。限定作用の進んだ形は、助詞・助動詞の持つ性質の分類が示してゐる。中學の文法書をみても、助動詞には受身・可能・使役・崇敬・打消・自發・時・推量・指定・希

望・咏嘆・比況等をあげ、助詞には、疑問・反語・假定・確定・條件・並列・指定・禁止・願望・感嘆等をあげてゐる。この分類には猶混雜があるが、とにかく助動詞・助詞の限定作用の複雜に行きわたつた形をみることが出來る。

限定作用がはげしく行はるるほど、表現面は精緻になつて行く。換言すればこの限定作用によつて、幅が定位される(小著「構想の研究」參照)。この限定作用は、語形の上に行はれることもあり、語り方の上に行はれることもあり、隱約の上に行はるることもある。或る人達の間にあつて、單に「學校」といひ、單に「役所」といつて、それが何學校であり、何役所であるかが明かになる事がある。「國」或は「田舍」といへばその人の故國であり、「家」といへばその人の家庭であり、その故國その家庭が何であるかが限定される。この隱約によつて行はれる限定も可成り多い。しかしさういふ限定は、その行はるる範圍がさまで廣くはない。ただそれが特殊なものの間にのみ行はれてゐる。「瀨戸物」或は「唐津」が陶磁器の通稱になり、茶の飲器たる茶碗が陶磁製の飲食器となり、更に飯の食器となる如き限定作用がある。しかしかかる限定作用は、暗默の中に行はれるに相違ないが、その範圍は廣くてもはや公約の形になつてゐる。

文の組織に於ける限定作用には、主語たる限定完了語がある。これは文の組織に參加する以前に旣に限定を完了してゐる。この限定完了語がこの文の組織に於いて、二重の限定を受ける。一方はその上部に附加する限定作用であつて、これは修飾語である。「美しい」「高い」「靑い」の如き限定は、この限定完了語に對して持續的の限定をする。修飾語は持續限定である。然るに下部につく限定作用、卽ち述語の限定は、一時的特殊的限定作用である。而してこの「見る」「取る」「切る」の如き限定は、常に持續的に行はるる限定ではなくて、それぞれの特殊の場合、一時的になさるる限定であつて、次には更に別の限定が可能である。しかも限定の要求せらるるのは、特殊的な限定である。修飾

語も、花の限定に對して、「美しい」「青い」その他様様の限定をなし得るが、しかし一度「美しい」と限定すれば、これは容易に變更せしめ得ない。もし變更するとすれば、「美しかつた花がけがされた」といふやうにして、「美しい」を再び限定しなくてはならぬ。「美しい」といふ限定をそのままにして、次の限定を加へなくてはならぬ。然るに述語は「咲く」をそのまま「散る」にかへ、「見る」をそのまま「折る」にかへることが出來る。自分を限定の對象としないで、直に他の限定にかへる事が出來る。故に述語は全體が限定そのままである。かくて主語は被限定者、修飾語は比較作用による持續的限定者、述語は完全なる限定者である。故に動詞その他文の述語となる語が、言葉での表現の中心である。――表現とは限定作用であるから。（補語と述語との關係は、修飾語と主語との關係に比することが出來るから、ここでは省く。）

以上の如くにして「青い花が咲いた」といふ一つの限定が成り立つ。この限定によつて主語の受くる新らしい限定作用が明瞭になる。主語がその屬性乃至作用として、主語以外の各語を生じたのではなくて、主語以外の各語が、主語をあらはしたのである。明かにされたのは主語であつて、述語ではない。主語は完全に被限定性である。限定性ではない。

文の構成の上で、主語が受くる限定は何であるか。

第一限定　數、格

第二限定　比較

第三限定　實現

第四限定　時、法、態

しかも第三、第四は結合して、曲折の形をとる事が多い。そして語序が大體限定の順序をとつてゐる。かくの如く限定に限定を重ねて、最後の限定に至つて、文は成立する。而して主語は主として名詞であり、述語は主として動詞である。動詞の限定作用が最も有力であるから、いつも文の中心に動詞が居、被限定者として名詞が居る。中には動詞のない述語もある。「旅は道づれ、世は情」の如くである。しかし「道づれ」「情」は、そこに嘗つてあつた述語の狀態を想像で補ふので、補はれる働を通じて豐かになり、爲に言葉を一層簡結だと感ずることになる。これは有―無にわたる狀態の補充作用である。かういふ文の主要部に對する補充作用によつて文に簡明と張力とを與ふることは、よく行はれる。

支那の畫には一つの鳥でも、一つの草でも、一つの山でも、それをこつちから、あつちから、つくづくと見て居る態度がある。それ故支那の畫に對してゐると、如何にも形を見盡してゐるといふ感がする。隨つて支那の畫史には、形體究盡といふ言葉がよくあらはれて居る。十のものを十はおろか、十一、十二にも見て居る根强さがある。

森田恒友氏が、かういふ事を言つて居られた。「近頃支那の畫を注意する人が增して來たのは幾分流行的であるとしても、結構な事に相違ない。だが大體私は、本當の事を言ふと、支那畫より日本の畫を好む性質で、大和畫系統のもの、南畫でも日本人の手に成つたものの方が、明るくて見て樂な事などが性分に向くのだが、支那人の仕事を見ると矢つ張り感心する。どうも彼等の仕事は悠悠閑閑として、幾日でも一畫紙の上に遊んで成された感のものが多く、畫趣が大きいのに自然頭が下るが、どうも何となし明るくないものだから、見てゐて樂でないものがある。悠悠たる

畫事程見て樂な筈なのに、不思議に樂でないものがひそむ。其處に支那といふ國の分らないものがある。支那料理は實にうまい。料理として、最も發達したものだらうと誰もよく言ふが、吾吾の胃袋は毎日の支那料理には到底堪へない。之と先づ同じやうなものかも知れぬ。」

これは大變に面白い觀察だ。描く態度は悠悠として居るが、見る態度に、急迫し逼迫してゐるものがあるから、畫面が甚しく嶮峻である。眼を刺す程の烈しさである。かういふ「究盡」したものからは、「鬼氣」が出てくる。鬼氣は支那の長所であり、同時に短所である。

ところが吾等の認識はここで止らない。更にも一歩を進める。

名優九代目市川團十郎の「毒饅頭」の加藤清正は有名な當り藝ですが、初演の時の夢さめの場で、「扨は今のは夢であつたか」と言つたのを、再演の時に「夢であつたか」と改めて晩年は「夢か」と言つただけで、初演以上の味ひを出されたのも、楷書から行書、草書の順序を經たもので、これを他人が初演から「夢だ」と言ふセリフだけ眞似はしても所詮團十郎の味ひは出せない道理で、うまく行く筈はないのでございます。(中央公論、昭和九年五月號)

と「吉右衞門藝談」では語つて居る。この有の形から無の形に向つて進むのが、東洋の認識である。有の定位に滿足しないで、漸次に無の定位に進むのが、東洋の認識である。「扨は今のは夢であつたか」が、「夢であつたか」となり、更に「夢か」に進んで行くのが、この具體的の例である。

これを「源氏物語」にも見ることが出來る。「桐壺」のはじめの方に、桐壺の孤獨なことを言ひ、また皇子御出生を言つて、

父の大納言は亡くなりて、母北の方なむ、いにしへの人の由あるにて、親うち具し、さしあたりて世のおぼえ花やかなる御方方にも劣らず、何事の儀式をもてなし給ひけれど、とり立ててはかばかしき御後見しなければ、事ある時は、なほ拠所なく心細げなり。前の世にも御契や深かりけむ、世になく淸らなる玉の男御子さへ生れ給ひぬ。いつしかと心許ながらせ給ひて、急ぎ參らせて御覽ずるに、珍らかなる兒の御貌なり。

とある。そこでその玉の男御子を急ぎ參らせて御覽じたのは、誰方かといふことが問題になる。母親とも見えるが、また前の世の御契深かりしかといふ前文によつては、帝とも見給れるのである。何れにしても急ぎ見にゆかれた方の表示が缺けてゐる。「いつしかと」云云の文には主語が無い。しかも主語にあたり得る人は、この場合二人數へ得られるとすれば、この主語缺落は、文章を不完全にする譯である。然るにその事なくして、かへつて文章を緊張せしめて居、急ぎ御覽ぜられたのも帝であることが、文の氣はひで知られる。これは文の不完全でなくて、文の緊張である。「源氏物語」のかかる省略は、全卷に滿ちてゐる。曖昧のやうで、かへつて緊張がある。讀むに從つて、これを讀み補つて行くからである。

英語では自己の代名詞Iを、いつも大文字でかいてゐる。そこには語るものの位置が、第一にしかも常に意識されてゐる。然るに日本の言葉では、主語は省略せられる。「私は」といふ言葉を頻發させるのは、謹みなき失禮の態度と感じられる。日本の意志は、主語を露出せずとも自然に知らるるのである。また日本語には身分の上下をあらはし、社會的地位の程度を示す言葉が發達してゐる。例へば「妻」の呼び方でも、「奥さん」「お神さん」「家内」「妻(さい)」「細君」「かかあ」「山の神」「夫人」「令閨」「奥方」「奥」「北の方」「御臺所」その他種種あり、一一狀態が相違してゐ

る。隨つてその述語に於いても、それぞれに相當した敬稱の相違がある。「見る」にしても、「見る」「御覽になる」「見せる」「お目にかける」「お目にふれる」「お目にとまる」その他。故に主語を省略しても通じ得る。敬語は東京と大阪では、東京の方が發達して居る。これは東京の方が、過去に於いて社會階級が精しく發達して居たからである。

また石井庄司氏は「よみの構造」の論文で、次の如く言つて居られる。

枕草子の「春は曙。云云」の條を讀む。大抵の註釋書には「春は曙」の下に「いとをかし」といふやうな言葉の省略せられてゐることを指摘するだけで、「春は曙」といふことばの眞義を「よむ」ことに努めないのである。次に何の言葉が省かれてゐるかどうか、それは單なる智識である。吾吾はいま眼前にある「春は曙」といふ清少納言の口をほとばしり出た「ことば」を讀むのである。これは「春は曙、いとをかし」などといふ。間の伸びたことばでなく、もつと生命の流を宿した文である。この場合、「春は曙」の「は」が一つの重要な鍵を持つてゐる。「春は曙」をそのまま讀む事が出來るのである。（コトバ・昭和九年三月號）

然らば註釋でなくてこれを直接に讀めば、どうなるか。それについて注意すべきは、「春は曙」と體言で言ひ切つてゐる點である。體言は內に働きを持つてゐる。しかしその働きはまだ發現してゐない。發現以前の形である。これは限定されて後はじめて、働きとなり得る。卽ち體言は「扨は今のは夢であつたか」を「夢か」に定位せしめ得たやうに、之を發現後の形にすることが出來る。子供の言葉は、多く體言で語られる。「うまうま」と言ひ、「ととと」と言ふ。それ等の言葉には、「うまうま」や「とととと」が持ち得る樣樣の可能性がある。それは、その時時の事情で、明瞭に限定される。この體言を限定する言葉があらはれて來れば、體言ははじめて明瞭になる。この體言の限定作用を、高度

に用ひたのが、この場合の「春は曙」の表現である。

「春は曙」の形から出てくる景觀は無限である。甚しい多様であり、甚しい未決定である。この甚しい無限を持つ形は、形自身から見ると、實に單純であり、簡素である。これが「無」である。「無」とは數學的の零ではない。形としては零に近いけれども、この中に無限の可能性がある。單一なる形が無限の可能性を持つこと、その無限性は形體的でなくて、可能的である。かかる未表現の形でしかも無限なるものが、「無」である。やがて無限の「有」たり得るものが、未だ有たらざる狀態である。この無限の可能性が、可能性のままで居るのは、沈默である。しかしこの沈默は自らかくて破れる時がくる。「春は曙」は、「春」の無と、「曙」の無とから成つて居る。「春」の無と「曙」の無との可能の發動形が、互に交錯すると「は」になる。「は」は兩者の沈默の僅かに破れた形であり、春と曙との兩者を定位したのである。「春」は「は」を通して「曙」を限定し、「曙」は「は」を通して「春」を限定する。「春」の動向と「曙」の動向とが、ここに交融してゐる。「は」が「春は曙」の一つの重要な鍵であると言はれた意味が此處にある。春と曙とは、「は」で第一の表現を持つてゐる。「は」は春の意向がどこにあるか、曙の意向がどこにあるかを示す第一の鍵である。ここに「無」は「有」を持つ。しかしこれで止めてしまつた。「春は曙」と言ひ切つて、ぴつたり止めてしまつた。この止め方が實に明瞭で確實で、不動である。そこで、この定位に導かれて、春によつて生ずる可能なる樣樣、卽ち春の無、それから曙によつて生ずる可能なる樣樣、卽ち曙の無、この兩者の無が、曙は春を、春は曙を、それぞれの有にかへて來る。「曙」の無は「春は」が有つて、曙だけでは定位せられぬ定位作用を生かしてくる。「春」の無は、「は曙」があつて、定位作用が生きて來る。この定位作用で、「春は曙」で定位の交互作用が確立してくる。だからこの「春は曙」は、はじめか

ら「春は曙」である。省略せられて居るのではない。そこに一切がふくまれて居るのである。そして同時にこの定位作用によつて、一切はあらはれて居るのである。故に、この「春は曙」と體言で明瞭に言ひ切つた定位作用は、はじめからこの形で定立して居るのである。はじめから挿入すべき言葉を持つて居ない。それは丁度「扨は今のは夢であつたか」の省略形が、「夢であつたか」でないと同様である。兩者はそれぞれ限定作用がちがつてゐる。別な定位である。また「夢か」が、前二者の省略形でないことも同一である。これは前二者をふくんで、新らしく定位されたものである。新らしい「無」である。隨つてこれは前者の省略からは得られない。新らしい生命である。言葉の實踐性中に、かかる定位作用を重要な性質として含むのが、我等の認識である。

石井氏はまた同じ論文に於いて、「なほ又例をあげるならば」と言つて、次の如く續けてゐられる。

芭蕉の奥の細道の中に、

まづ高館にのぼれば北上川は南部より流るる大河なり。

といふ一節がある。これも大抵の註釋書には「まづ高館にのぼれば北上川見ゆ。北上川は南部より流るる大河なり」の二つの文章の組合せであつて、省略法によつたとある。しかし右のやうに二文とみるとき、「北上川は南部より流るる大河なり」の一句は、實に無味乾燥な、概念的説明となる。ところが奥の細道は原文のまま「よむ」べきものである。これは芭蕉が高館に登つた時の驚きを表現した文となつて生きて來るのである。「よむ」とは何を「よむ」のであるか、深く考へればならぬ處である。

然らば何故「原文のまま」讀むべきであるか。この文を認識の順序でみるならば、

1. まづ高館にのぼる。

2. 北上川みゆ。

3. 北上川は南部より流るる大河である。

となつて、註釋書が「まづ高館にのぼれば北上川見ゆ。北上川は南部より流るる大河なり」といふ解釋は誤ではない。然るに何故この認識的に正しい註釋を否とするか。それは、2と3との間にあまりに空隙を置きすぎるからである。この「北上川見ゆ」と「北上川は南部より流るる大河なり」とは、可成りに廣い空隙を持つて隔離してゐる。これでは芭蕉が高館にのぼつて、北上川を驚き眺めた感動が出ない。感動してみたものから、感動をとり除けば、甚しく相違したものになる。原文のまま讀むのは、「芭蕉が高館に登つた時の驚き」を、そのままに讀む事である。即ち2と3との「二つの文章の組合せであつて、省略法によつた」といふ見方は、忠實に原文を讀んでゐるとは言へない。芭蕉は北上川を見、そして直ちに、目の前に流れてゐる北上川に、「南部より流るる大河なり」と感動してゐる。しかしこの感動は說明の如くに見えるが、假にこれを說明としても、この說明は知解的な說明ではなくて、流れて居る川に感動して居る理解である。感動の理解である。北上川と直接に結合してゐる。北上川を見る働と、北上川を理解する働とが、ここでは一致して居る。見る働にも感動があり、知る働にも感動がある。高館にのぼれば、そこに意外にも大川がある。この大川は南部より流るる大川である。北上川を見て、川の流を見て、感動してゐる。そこで、1と2とが密接に結合したやうに、2と3とも密接に結合する。高館にのぼつて見た北上川と、南部より流るる大河の北上川とは、そのまま一致した北上川である。それ故に、「高館にのぼれば北上川は」と一氣につづき、北上川をそのまま主語にして、次の「南部より流るる大河なり」と一氣に續いてゐる。これは省略ではない。はじめからの間斷なき伸展である。

見る働と、解釋する形とを分離すれば、感動の姿はなくなつて居る。登り、見、知る働が、空隙のない一連の進行として續いて、はじめて、

まづ高館にのぼれば北上川は南部より流る大河なり。

の表現が、一氣に成立する。省略によつて成立したものでなくて、斷ゆることなき仲展によつて成立したのである。この仲展は斷絶することなき形であるから、1は直に2の主語的位置をとり、2は直に3の主語的位置をとる。この主語的定位による間斷なきものを、中央で切斷しては、原意と全く異つたものになる。石井氏がいふ原文のまま讀むべきだといふ意味はここにあるであらう。

そしてこの定位に於いて、「北上川見ゆ」を無位に置けば、

1. まづ高館にのぼれば、
2. 北上川見ゆ。
3. 北上川は南部より流るる大河なり。

の三項に於いて、第二項は第三項の主語北上川に一致し、「北上川は」の體言となり終る。この體言化、即ち無の定位は、この表現を明瞭にする。それは丁度「枕草子」に於いて、「春は曙」といふ體言化の無位定位が、彈力を持つのと同一である。しかもこの北上川の表現は、見る立場の連續に於ける無の定位である。故にこの表現を讀むのは、第一に見る働の立場に立つこと、第二に見る働が書かれる働に轉位する立場に立つこと、第三に見る働が書かれる働に轉位する場合に、その中心となる無の定位作用をよみ取ること。この三つが大切である。

かくて讀むとは、文を讀むことであり、文を讀むとは、それの見られた働、書かれた働、更に無の定位の働を讀みとることである。卽ち間斷なき連續が、無の定位に向ふ働の形でよむのである。書き終れる形で讀むのでなくて、間斷なき働の中にあつて、讀むのである。この働を放棄すれば、ここに「北上川は『南部より流るる大河なり』の一句は、實に無味乾燥な、槪念的說明となる」のである。かくて視と表現との連結の立場、しかも限定の限定によつて得る表現の無の定位によつて讀むのが、讀みの實踐性である。卽ち無の中軸性の立場に立つて讀むのが、讀みの實踐性である。言葉の簡潔とは無の定位の意味である。

次にかかる言葉の定位は、必ず嚴密に成立し得るかどうかを考へなくてはならぬ。もし言葉に思視と一致しない組織があるとすれば、言葉に如何に限定作用、定立作用が行はれたとしても、思視はこれと無關係になる。

語る言葉の思視は、言葉の上に必ずしも現れて働くのではない。思視が隱れて働くことが多い。そこで言葉の論理的の意味と、思視的の意味とが相違する場合が出てくる。これが言葉の幅である。例へば「立つ」といふ言葉であるが、第一には地に對する位置である。「立ち上る」「立ちとまる」の「立ち」である。第二にはその立てる位置からの移動を示す。「去り行く」「出發」の立ちである。第三にはこの地點に移動し來る意味。「春立つ」「秋立つ」は、「春去る」「秋去る」でなくて、「春來る」「秋來る」である。第一は停立であり、第二は先方へ向つての移動であり、第三は此處へ向つての移動である。その現狀に甚しい相違がある。然るにも係らず、それが同じく「立つ」によつて現さるる所以は、「立つ」に共通した一つの運動がある。立ち上るのも運動であれば、行くのも、來るのも運動である。「立ち」の一般性には、この運動があつて、それぞれの立ちを統一してゐる。統一してゐるとは言ふものの運動の方向に

ついては、甚しい相違がある。

また言葉の文法上の時は、事實上の時と同一でない。文法上の時は、現實と感ずるものが現在である。随つて觀察の立場によつて、同一の事實上の時が、或は現在にもなり、過去にもなり、また未來にもなる。現在の意味には、四つある。

一、現在の時は動詞の終止形である。

二、眞理、習慣、格言等は、現在の形をとる。是等は何れも不變的な性質を示すものである。眞理も習慣も不變的である。かかる不變性の時は、「持續的現在」である。

三、歴史上の事實も現在の形をとる。これは「歴史的現在」である。歴史上の事實は既に決定的不變的である。

四、動作の繼續進行中のものも、現在の形をとる。これもやがては止む時があり得るに相違ないが、現在の形では豫想的に不變的に永續する。「豫想的現在」である。

この中第一は直感直視の現在形である。第二第三は思惟的の不變形である。第四は直感直視の現在形と、不變の現在形との交錯である。「今日は晴れたり」の形は、一部は今日の中既に通過せる時にまたがり、一部は現在、一部は未來である。未來にも猶この過去現在の形で繼續することを豫想してゐる。故にこの三者を現在の形で代表することが出來る。而してかかる進行の中心が現在にある。故に之を現在と考へ得るのである。もしこの動作がある時期に於いて終了せる場合には、現在完了である。これは現在形としての現在を持つと共に、すでにその進行が完結し、豫想は不變的でない。

かくの如くであつて、時の言葉もその基礎には一般形があるけれども、表現せられた形體は、決して思視と一致するものではない。

更にも少し社會的多様性を持つ言葉の例を求めると「小僧」の如き語がある。「小僧」の論理的意味は、「僧侶たらんとする少年」乃至は「小さき僧侶」である。しかし思視的意味としては、之に加はる思視の三つの性質によつて、三種になる。

1. 思視の單なる脱失によつて、思視表出のない意味、卽ち「少年」といふのみの意味になる。しかしこの思志脱失は、平衡狀態ではないから、思視の何れかの方向に傾く。そして「少年」の意味の變更によつて、商店の少年使用人の意ともなる。

2. 肯定的思視によつて、「愛する少年」の意味になる。

3. 否定的思視によつて、「癪にさはる少年」の意味になる。

そして三者何れの意味であるかは、語る思視が直接に決定する。そして他の一切の可能的思視は、言葉の背後に沈んで、その陰影となる。これが言葉の餘韻である。言葉の表出的意味と、この埋沒的意味とを併せ考へたものが、言葉の幅である。

また「腕のある人」といふ言葉があり、これには二つの可能的意味がある。

1. 二本の腕を持つて居る人。

2. 敏腕家、卽ち才能ある人。

かういふ例は可成り多い。これを體に關した言葉から選んでも、さういふ幅を持つ表出には、「手が長い」「尻が輕い」「尻が重い」「鼻の下が長い」「眼尻が下つてゐる」「二枚舌」等諸種ある。幅のある言葉を思視的に決定する面白さは、落語にもあり、川柳にもあり、日常の會話にもある。ただ日常の會話では、同音異義の言葉をいとふが、一言多義の語をばいとはない。そこには言葉の陰影が多いからである。

言葉の思視の世界は、その構造が全く適合して居ない。この二つの世界は、關係こそ緊密であるが、各獨自の自律的世界を作つて居り、その一方は他方の模寫ではない。思視と言葉との並行を假定すると、言葉は計劃的熟慮の下に創造せられたこととなり、また事實より見ても、三つの點に於いて思視と言葉とは不適合であると言はれる。一つの言葉に多くの思視構造の適する場合、即ち言葉の多義なる場合、これが第一。反對に一つの思視に多くの言語構造が應じ得る場合、即ち類語の場合、これが第二。類語的表出が再び多義なる場合、これが第三。

如何にも思視と言葉とは、全部が適合しては居ない。しかし適合の方向に進み得るものであり、適合するのが意志である。適合しないのは吾等の要求ではない。隨つて適合しない言葉と思視との關係は、思視的には異常的狀態である。故に之は言葉と思視との正常の狀態となる事は出來ない。しかしこの異常の狀態の中で、思視の屈折が、かへつて明かにされる。

次に言葉と思視との並行を假定すると、言葉は計劃的熟慮によつて作られたことになつて、事實に反するといふが、もともと思視も人間生活の最初から、今日の如くに出來上つて居た譯ではない。漸次に今日の精緻に達したのである。言葉も亦同樣で、漸次に今日の精緻に達したのである。最初の狀態にあつては、その原始の樣狀で、言葉と思視とは

並行してゐる。思視が複雜になれば、言葉も亦複雜になる。その關係は必ずしも嚴密では無いが、しかし常に平衡の保たれる狀態に進んでゐる。さういふ工夫から言葉の多義も生れ、類語も生れ、更に類語の多義も生れる。これは思視と言葉との背反でなくて、思視と言葉との一致を示さうとする要求である。ここに思視も言葉も活きてゐる。思視の面の中に生れた言葉か、中軸を展開軸として表現面に發現する。中軸による廻轉は、思視面と表現面とを相應ぜしめる。これは言葉にも、思惟にも、その基礎に働いてゐる意志、即ち中軸が、兩者を一致せしむる構造をとらせる。隨つてその不一致の構造は、即ち幅は、思視の定位によつて一つが働き、他が背後に沈み、言葉の陰影として働くのである。この言葉の柔軟性、常に形をかへて進み得る彈力性、即ち言葉の活動性が「言靈」である。

今からもう二十何年もの前である。私は植物細胞學に興味を持つて、實驗室で顯微鏡ばかり眺めて暮したことがあつた。信州の二月はまだ全くの嚴冬で、雪は深く、地は凍りはてゝゐる。その冬の中に、私は桑の皮部のセクションを切つて、處理して鏡下に置いた。みると細胞の壁に沿つて、細胞液がぐるぐる動いてゐる。細胞はもう冬の眠から覺めたのである。春の動きは先づ細胞の中に現はれてゐる。私は驚いてじつと顯微鏡下の細胞をのぞきつめた。

細胞の意志はもう冬の中に働き出してゐる。地も木肌も凍りついて居るほどの冬の中に、もう植物の意志は動いてゐる。今日はまだ、すべての原形質に共通な性質は、まだ確定してゐないやうである。ただ原形質は均等でなくて不均等であること、その不均當な原形質は、絕えず活動してゐること、この二つは明かである。隨つて細胞の生活は、活動的な場合に於いて盛である。この細胞の中に活動的に働くのは、細胞の意志である。細胞を動かして居る活動的なものは、植物の意志である。私は顯微鏡下に動いてゐる春の動きに驚いたのである。意志はすべての形に先行して

ゐる。

細胞の原形質にみる不均等性と活動性とは、即ちまた言葉の性質でもある。言葉に幅のあることは、言葉と思視との矛盾を示すものでなくて、言葉と思視との一致せんとする要求を示すものである。言葉は確定した定形の上に成立するものでなくて、不均等な、不定形なる變形の上に成立するものである。言葉のこの可變性が、不變性よりも一層注意されなくてはならぬ。

「腕のある人」を「才能者」の意味とする表現は、「腕のある」を以つて、「腕に働きある」の意味を示し、しかも「才能ある」よりも、もつと具體的である。そこに働の形をみるからである。才能といふ抽象形をとらないで、腕のあるといふ具體形をとることが、認識的に明白であり、そこに思視の姿も明かである。故に「腕のある人」は、言葉の組織からは、如何にも間接のやうであるが、その組織の形では、かへつて直接である。かかる言葉のしなやかさがます程、言葉の表現性が盛になる。そしてその言葉の表現性の背後には思視がある。故に言葉を語るにも、言葉を聞くにも、その最も直接なるものは、その言葉に先行する思視である。言葉を語るのは、思視を語るのであり、言葉を聞くのは、思視を聞くのである。言葉に先行する思視を語り、思視を聞くのである。先行する思視は、中軸の思視である。故に語り、聞く言葉の定位は、中軸の方向に於いてせられる。中軸は思視面と表現面との關係では展開點であるから、展開點の立場でせらるる事になる。

五　寡默の美

日本の言葉の性質として、言葉の幅とその定位との二つの有ることをみて來た。然らば國語の美も、要するにこの二つの性質以外にはない。卽ち幅の美と定位の美との二つである。幅の美は未決定性の美であり、定位の美は限定性の美、簡素の美である。

幅とは、展開點 E とその移動 E′ との間にある言葉の性質である。この特色を歐羅巴語が、「性」に對する敏感性と比較すればよくわかる。歐羅巴語は「性」の範圍を擴大して、獨逸語や古代英語は、手、足、手指、足指にまで性別をつけてゐる。手を女性、手指を男性、足を男性、足指を女性とする程に細かである。何故手指は男性であるのに、足指は女性であるか。その理由は必ずしも論理的ではない。「性」を人間以外の世界に迄擴大して、太陽その他にまで「性別」を行ふのは、吾等から見れば、實に性別過多である。かかる性別過多は、人間中心の視方考へ方から物を見る結果である。物を男性的なるもの、或は女性的なるものと見る視方、感じ方は、東洋にはない。東洋では自然中心の視方考へ方をとつて居る。物を自然の立場から見るけれども、人間の立場からは見ない。かういふ點でも、國語は幅がある。性別による限定を受けて居ないからである。

また同じ日本の中でも、幅の廣狹に對して、相違がある。先に引用して谷崎氏の大阪語と東京語との比較でも明かであるやうに、大阪語は東京語よりも幅がある。東京語は論理的であるらしい。自分の家の子供の言葉を聞いてゐてもその感がする。四つの男の子はガギグゲゴが發音出來ず、ナニヌネノに發音してゐる程度の子供であるが「もしは入つて居ればは」といふ。「もしは入つてゐる場合には」の意味である。「は入つてゐれば」を名詞形にするのである。名詞形にして、語感を整理することをする。また桃太郎の話などをさせてみると、助詞を正確にして、一一省略せず

に使つてゐる。大阪が助詞を省略するのと可成りちがつて居る。四つ位の子供の中から、ちやんと精密に言葉を使はうとし、論理的に整理しようとしてゐる。それに比べると大阪語は、幅があり、未決定的である。隨つて直截に論議し、理義を明白にするには、東京語が適當であるが、餘情をふくんで、含蓄あらしめるのには、大阪語が勝つてゐる。東京語は喜劇には適しない。故に喜劇では大阪語に及ばぬ。東京で五九郎劇の優位に居る所以である。東京言葉は、理詰であつて、人を笑はせることは不得手である。で大辻司郎氏などの漫文でも、最後の助動詞「です」を「デス」と特にかいて、この歪などで人をわらはせるに過ぎない。「人氣者の人相判斷」(昭和八年八月號主婦之友)に、菊池寛氏の人相について、

このお顏は、大變つまつてゐますれ。小さいときは苦勞されたが、中年から運氣が開けて、いよいよ盛運に向ふ相で、壽命が非常に長い。耳は持聽官といつて、こんなに厚く圓い耳は、何事も早耳で、聰明です。だから新聞雜誌の記者に適してゐるです。

小さいときから、兩親の御恩は、あまり受けずに苦勞してゐられるらしいが、その苦勞のお陰で、貴方の運命は開けて行くのだから、決して御兩親を恨んではなりませんぞ。

眉を兄弟宮といひますが、こんな太い眉の人は、兄弟が少く、あつても、あまり賴りにはなりませんぞ。

麻雀だの競馬だのといふ勝負事が好きで、また上手だから、相場などやれば、うまく當りさへすれば儲かるが、外れると損をします。

そんな危險なことをしないで、どうです、一つ奮發して小說家になつて御覽なさい。その方が出世が早くて、而も確實ですよ。

この人相判斷のをかしさは、その論理性にある。言葉は助動詞の歪にある。菊池寛氏についで、飯塚敏子孃が出てゐる。序に之も引用する。

これはまた素晴らしいシャンで、あなたはあるですな。富士額で、眉が優しく、眼に愛嬌があるから、人氣商賣をやれば、繁昌します。

あなたにはお父さんがありますな。祕くしても駄目です。ちやんと骨相に現れてゐます。

あなたのやうな鼻の形をした人は、寒いと風邪を引き、暑いと汗をかく性分ですから、暑さ寒さに氣をつけるんですよ。氣にしちや困るが、あなたは結婚しない方がいいですぞ、私のこの忠告に反いて、もしも結婚なさると、喜ぶ男はたつた一人で、失望する男は無數といふ、怪しからぬことになりますぞ。

これは未決定性の言葉のをかしさではなくて、決定性のをかしさである。

また日本の語序では、「余は身命を賭して行く」といふのが、普通の形である。「行く」といふ述語に到る迄に、「身命を賭して」の如く、考察の材料を挿入してゐる。斷定は最後であるのに、この語序を變更した、斷定を先にする形をとれば、「余は行く、身命を賭して」となる。この形は西洋では普通であつても、日本では特殊である。他の人に斷乎として考察の餘地を與へてゐない。この形は日本語としては甚だ強く、强調された語法である。ここにも亦幅のない、激しい語法がある。

かくの如く、幅よりも定位の問題、即ち E'F の問題を考察すれば、明確な定位性の美、簡素の美が生じてくる。ここに國語の上の最も多くの美がある。

未決定性の美であつても、それが讀まれる場合は、限定的である。未決定性のものを、未決定によむのではない。未決定のものを、讀む働、聞く働の中で限定する。「源氏物語」の未決定性描寫も、これを讀む人の限定によつて、明確になる。未決定なるものがその中に、決定する働を刺戟し、自己の未決定に働く限定作用を誘發する處に、未決定性の美がある。換言すれば未決定性とは、あくまで文の形體上のことで、それが讀まれたものは、決定的である。この未決定を決定によむ處に、讀の彈性と深度とがある。故に作品の形體は未決定であり、讀者に對しては定位的でなくてはならぬ。かくの如き形が未決定性の美であるが、國語にあつては、未決定性のさし示す方向の中に、自ら一つの性質が指定されてゐる。これがその特色の一つである。その一方向とは、限定が寡默なる定位を導く方向である。卽ち定位が求心的であり、單一化の方向に進むべきことが要求せられる。かくて未決定性の美は、讀みの形においては、寡默の形である。これが展開點 E を E′ E″ 等に進めた結果おこる處の限定性、卽ち E′ F E″ F 等の性質である。故に展開點の移動は、自然に二つの結果を生じてゐる。

一、E′ に移動した後方をふりかへれば、E E′ があり、これが言葉の幅になる。ここに一つの美がある。

二、E′ に移動した前方をみれば、E′ F があり、これが言葉の定位になる。ここに一つの美がある。

而して E は中軸であるから、この幅と定位、卽ち未決定と限定とは、中軸移動の生産である。かくて國語の美は、要約すれば、中軸の位置に關するのである。

言葉は變化せんとする傾向と、定着せんとする傾向とがある。變化の傾向は、分裂化の傾向に著しくあらはれ、定着の傾向は單一化に著しくあらはれる。而してこの兩者は同時に行はれ、その行はれ方は時代によつてそれぞれの特

色がある。口語動詞の語尾變化等もその一例である。また「だに」「すら」「さへ」等にも、この變化の消息は見られる。比較語の重點の分裂した結果は、

1. だに。輕きを擧げて重きを言外にさとらしむ。即ち價値的に輕きより、重きに向ふ。比較移動。
2. すら。或る物を擧げて他を類推せしむ。即ち價値に關せず、特殊より一般に向ふ。類推延長。
3. さへ。或る事柄に更に重きもの加はる。即ち價値的に重きを附加する。增大移動。

である。この三者を比較するに、

だに、さへ。共に重きを加ふ。增大。

だに、すら。共に比較の移動。移動。

增大と移動の二點にて、「だに」「すら」は「さへ」に集中することが出來る。かくて比較點の移動による三樣の分裂は、ここに於いて、「さへ」に集中し、歸一する事が出來る。故に「實の一つだに無きぞ悲しき」「禽獸すら恩を知る」「暑きに風さへなし」の三樣は、これを口語にすれば、何れも「さへ」に歸一してしまふのである。

かかる歸一の傾向は、言葉の限定に基くもので、この限定の結果は、「さへ」にても明かなる如く、語のふくむ意味は增大し幅を增加してくる。之に反してもし言葉が分裂した場合には、幅は減少してくる。隨つて限定作用と幅との密接なる關係を知る事が出來る。

外國語に飜譯された自分の著述を見ると變な氣がする。これはたしかに自分の著述であり、他人の著述ではない。しかし、これを自分の著述だといふには、ここにさういひきれない者が殘る。それは丁度夜行の汽車などに乘つてゐ

て、ふとガラスに寫つてゐる自分の顏を見るやうな心持である。自分の顏には相違ないが、これを自分の顏といひ切るには、如何にも生氣がなくて變である。あの世の顏の樣であり、何かしら皮一重を隔てて自分の顏に觸れてゐるやうである。飜譯された自分の文章をみるのは、ひどく荒涼したものである。しかも文章の味の中で、最も譯しにくいのは、沈默の味、餘白の味であらう。論理を追つてゐる文章でもさうであるから、文學上の作品で、特に沈默の味、餘白の味ある俳句などは一層さうである。小泉八雲氏の俳句の英文飜譯は上手なものと言へるか言へぬか私にはわからぬが、しかし隨分原作とは心持の變つたものになつてゐる。だから作者自身が讀んだら、可成り變な氣がするであらうと思ふ。その中でも譯し難いものは、「蝶蝶や」といふ樣な場合の「や」である。かういふ幅のあり、しかもその幅を寡默に定位すべき言葉では、譯すことは全然不可能だと言ひ得るのである。

知つてゐる人の文章を讀んでゐると、讀んでゐる間に、その人の特殊な聲音が聞えてくる。それ位聲音は大切なものだ。かういふ聲音は譯し得ぬものに相違ないが、しかし言葉をよむ時に、この聲音を讀み出さなくてはならぬ。ことに韻文を讀む時には、之を感ずる。例へば「萬葉集」の中大兄皇子の「三山の歌」

香具山は　畝火を愛しと　耳梨と　相爭ひき　神代より　斯くなるらし　古昔　も　然なれこそ　現身も　嬬を　爭ふらしき

の歌についてみると、香具山と耳梨山との愛の爭をいひ、次に「神代より斯くの如くであつたやうである」といふ推定をし、更に「古もさうであつた」と確定してゐる。この推定と確定とを通じて、第三に自分の現在の立場にかへつて、「現身も嬬を爭ふらしき」といつてゐる。この三つの判定の間に、中大兄皇子のため息を聞く思がする。かういふ嘆息は、この歌の中軸をなすものであるが、言葉の上には出てゐない。「斯くなれこそ」「然なれこそ」といふやうな判定の

中に、自らにして現れてゐる。しかしこれを飜譯することは不可能であらう。この何もない所に立ちのぼる嘆息、この餘白の嘆息、それを聞き落しては、この歌は成立たない。

一碧樓氏の第五句集「芝生」から、試に數首を拔く。

好日梅木々の花さき風のこゑ

とつとう鳥とつとうなく青くて低い山青くて高い山

天地霜夜わが机により

旅

秋の日飯白し雲白し

草に立つて聞ゆるは風吹くおと

水の音松の花さき

筧を山の水われに來る

是等の自由律俳句を貫いてゐる一つの特色は、助詞が著しく省略せられて居ること、その故に、各語が獨立して、全體の感が著しく漢詩に近いことである。試に引いた第一句、これは好き日和で、梅の木木に花さき、聞き入れば風の聲もするのである。この時第一節と第二節との下に、よんで行くと助詞を感ずるのに、ここにはそれが省略されてゐる。すべて物はなき後において、一層存在を感ぜしめる。父のことを心から思ふのは、父無き後である。助詞の感ぜらるる今、助詞なきを以つて一層その助詞を感ずる。愛惜の心を以つてさへ、助詞を感ずる。まだ助詞なき時代に

は、この感を持ち得なかつたに相違ないが、吾等のやうに發達した助詞を持つものは、それが當然あるべき地位に、無ければ一層その存在の感が大きい。存在の意向が生きてくる。ここに要求の形で助詞が出てくる。第二句、とつとう鳥は郭公鳥である。郭公鳥がないてゐる。とつとうと鳴いてゐる。青くて低い山がある。青くて高い山がある。むせるやうな青葉の山でなく郭公鳥をきいてゐるのである。「とつとう鳥がとつとうとなく。青くて低い山見え、青くて高い山見ゆ」の景觀である。ここにも節節の助詞が省略せられてゐる。第三句、天地に霜の氣が滿ちてゐる。夜深く室内に霜を感じてゐる。自分は今机によつて、窓外の天地に霜の滿ちしを感じてゐる。これが「天地　霜夜　わが机により」であらう。

かくの如くして、棄つることによつて、一層活活とするのが、これが是等の俳句の特色であらう。ここには說明のない、端的な直截な感受があり、その感受は、吾等が是等の俳句から感じ得らるるよりも遙かに短かい形である。故に感はむしろ句に滿ち溢れてゐる。この滿溢は、その句を緊張させる。餘白に立つ美の姿がここにある。

かういふ餘白による美に着目した讀み方がある。これを五十嵐力先生は、「接離法」と言つて居られる。

接離法は一種の句讀法と云うてもよい、文法上切るべき所を續け、續くべき所を切つて趣味を添ふる詞姿で、漢文家の謂ゆる上字下讀而下字上讀するものである。例へば文法上は「汝の言ふ所尤もなり。さりながら思うても見よ」と切るべき所を、「汝の言ふ所尤もなりさりながら。思うてもみよ。」とし、文法上「人心隔てぬ中の戯れは面白や。諸共に近くよりて語らむ」と切るべき所を「人心。隔てぬ中の戯れは。面白や諸共に。近くよりて語らむ。」とする類ひで、謠物、語り物、謠ひ物、朗讀、唱歌等、凡そ文章を美術的に讀むものにして此の詞姿を用ひぬはない。義太夫語りの口上に「太閤記何段目。竹本筑後掾三味線。鶴澤

某。」と切り、日蓮僧の讀經に「此の經は無明の闇を照らす大法燈也。生死の迷を斷つ大利劍也南無。妙法蓮華經南無。妙法蓮華經。」と切るが如き、凡て此の法を應用したものである。遠近法の文章の如き、此の接離斷續の趣に注意せずば、其の味はひの少なからざる部分が消え去るであらう。（新文章講話）

かかる餘白に關する味は、文の中心の味である。最初から無きものは、何の味にもならない。有るものを、E點移動によつて、EE′中に移し入れた場合に、はじめて餘白の價値が出てくる。

助詞も一一語源がわかるとは言へないが、大體に於いて最初は何れも獨立の意味を持つて居たらしい。「ぞ」は「其れ」を意味し、「こそ」は「此れ」「其れ」といふ同源の二つの言葉の重なつたもの、「より」は「由る」の連用形的のもので、「陸より行く」の如く經由を示し、更に一轉して「越路より行く」の如く出發點を表し、再轉して基點を表はし「花より美し」の如く、比較の基礎を示すやうになつたと說かれて居る。かくの如く助詞の變遷は、助詞をして實現の傾向を示すもの、特に精神的態度を示すものとなつて來た。

東の山は春日山なり。

の表現に於いて、支那文法にては、「東」「山」「春日山」を實辭とし、「の」「は」「なり」を虛辭と見てゐる。前者は身振にて現し得るもの、後者は身振にて現し得ぬものである。虛辭は實在を示さずして、實在の傾向を示すのである。實辭は虛辭によつて限定される。その限定の仕方は様様である。

東山をこれ春日山といふ。

東の山は卽ち春日山なり。

東にある山は即ちこれ春日山なり。

その他の限定の仕方がある。しかもその限定の仕方に、語る人の精神的態度がみえる。然るに言葉それ自身が、この限定をなすものがある。語尾の活用がこれである。語根は限定せられるもの、語尾は限定するものである。この限定せらるるものは、いはば實辭であり、限定するものは、いはば虛辭である。故に動詞の形は實辭と虛辭との複合體である。助詞が名詞を限定する形、「山は」「山に」「山の」「山を」等を、一種の曲折と考へてもよい。また接頭語、接尾語の結合も一種の曲折である。「君は月を見たか」を、音の膠着によつて、「君やあ、月よう見たか」の如くなる方言があり、「君やあ」「君よう」「月よう」の如きは、やや曲折形とみられる形であつて、名詞と助詞との結合が、曲折を有することを示すかと像想せしむる一形體である。

曲折よりも、助詞・助動詞の限定作用は、一層精緻である。動詞の曲折は、將然形・連用形・終止形・連體形・已然形・命令形等の數形のみである。これを零辭は更に細かに限定するのである。「は」「の」「に」等のなす限定作用を動詞はなし得ないので、動詞は連體形に於いてその限定を受くることを豫定してゐる。曲折と零辭との限定によつて、表現は細かに限定せられて、思視面よりの廻轉力となる。故に零辭は、表現の中軸をなすのである。かくの如く零辭が表現の中軸をなすことによつて、文の形體を短少になし得る。これが日本に短詩形の發達せる理由である。長歌は短歌に、短歌は俳句に向つて形體を短縮して居る。

零辭はもともと孤立語である。しかし身振に結合せず、外在に結合せず、內的態度に結合してゐる。この態度によつて表現の限定をしてゐる。故に表現の中軸となり、表現の精神的傾向となる。零辭自身は傾向的であり、未決定的

である。自らは何物をも示さないが、表現の作用の中にあつては、態度を示し、その立場によつて、限定作用をする。語るとは限定に限定を重ぬることであり、主語が限定されることである。主語的立場は一般的の立場であるが、この一般的の立場を、限定によつて、特殊的にする。それを語る間にも猶、語り方の上で、ある種の限定が加はる。例へば反復法と呼ばるる態度の如きである。高まる感は、それが反復せられる。ここにも一つの限定がある。しかしかかる反復は語以上のものであるから、ここには觸れない。

語ることのない沈默は、表現ではない。語らずして語る味、語らずして通ずる味、「以心傳心」の味が、沈默の味、寡默の味である。限定に限定をかさねて、定位し得たものは、寡默の味である。それは語を重ねることでなくて、語を制限することであり、語の示すものでなくて、語と語との間にふくむもの、語と語との間の關係態度を示すものである。現るることを少くして、現れざるもので支持すること、これが寡默の味である。隨つて日本は語るのに身振をいとふ。身振は限定を受くるものである。限定をうけて後表現となるべきものを、未限定の形で表現の中に出すのを厭ふのである。言葉と言葉との間をきくのが、眞に聞く態度である。日本の音樂をきくのにも、一つの音が終り、まだ次の音のはじまらぬ間をきくのが、大切な態度である。かくて限定によつて餘白が生ずる。限定と餘白とは E′E と E′F とが連續するやうに、連續した系統である。この餘白をきくこと、この餘白をみること、この行と行との間をよむこと、これが眼光紙背に徹する、讀の徹見である。隨つてその徹見にたふる文學は、餘白によつて生きなくてはならぬ。しかし餘白によつて生きるとは、必ずしも文章の形體を小にすることをのみ意味しない。長篇であつても、その句節の間にそれをなし得る。森鷗外氏が、その小説の中で、經歷を列記する場合がある。例へば「栗山大膳」

で、

利章の父栗山利安は、素播磨の赤松氏の支流で、小字は善助、中ごろ四郎右衛門と稱し、後に備後と名告つた。天文二十年に播磨國淡河(あがう)の城に生れ、永祿八年に十五歳で、同國姫山の城主黒田官兵衞孝高に仕へ、永祿十一年に孝高の嫡子松壽が生れてから、若殿附にせられた。孝高は忠之の祖父、後に長政となつた松壽は忠之の父である。

といふ風である。かういふ列記は履歴書のやうになり勝ちであるのに、鷗外氏の場外には、それが一一背景を持ち、立體的に明確になつて來るのが不思議である。これも餘白の味である。池大雅の如きも、畫面にかかれる處よりは、餘白がむづかしいと言つてゐたやうであるが、かういふ苦心が、日本の美の基礎である。そしてこの餘白の味に代表せらるる寡默の味は、日本の言葉の目ざして來た根本の性質である。換言すればこの美は、中軸によりて示さるる中軸性の美である。

〔附記〕この論文では、言葉を取扱つて、音を取扱はなかつた。それから言葉がなす文も、文法的の文に局限して、文章には考察を及ぼさなかつた。文法的文はいはば一兵卒である。文章はその文法的文の組織であり、一聯隊、一師團である。文法的文は一細胞であり、文章は一生體である。故に言葉の美學はそこ迄進まなければならぬし、文法的文には、美の問題は極めて根源の形に於いてのみしか含まれて居ない。しかし論文の大さははじめから豫定されて居るので、文章的文についての考察も亦、之を除いた。隨つて此處には、所謂修辭學の問題は、全く取扱ふことが出來なくて終つた。故に「言語美學」といひながら、十分なる言語の美學をなし得なかつた。(昭和九年十月二日午後)

昭和九年十二月二十五日印刷
昭和九年十二月三十一日發行

國語科學講座
（第十一回配本）

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十番地
株式會社　明治書院
代表者　三樹退三

印刷者　東京市神田區三崎町二丁目一番地
株式會社明章印刷所
代表者　細谷紘三

發行所　東京市神田錦町一丁目
株式會社　明治書院

Kimbara, Seigo
Gengogaku Gengo bigaku